

広島大学総合科学部報

Hiroshima University
School of Integrated Arts and Sciences

HISHO

2024年3月

No. 100



ひ

しょう



飛翔せよ、総科生。

飛翔

『飛翔』は広島大学総合科学部がどんなところなのか、
どんな人がいるのか、どんな魅力があるのかをもっともっと
多くの方に知ってもらうための総合科学部公式広報誌です。

2024年、創立50周年を迎える総合科学部と共に、
『飛翔』は創刊100号を迎えました。

『飛翔』は株式会社村上農園さんのご支援を受けて発行しております。

代表取締役社長の村上（旧姓田村）清貴さんは総合科学部生第6期生でいらっしゃいます。
本号では、卒業生インタビュー（P40）にもご協力いただいております。ぜひご覧ください。



〈メッセージ〉

私は新卒でリクルートに入社し、「リクルート事件」を、また村上農園に入ってから、「O-157の風評被害」を経験しました。それぞれ大きなダメージでしたが、その都度「ピンチはチャンス！」と考え、その後の飛翔につなげました。みなさんも人生で起こることに一喜一憂せず、自分のやるべきことを継続し続け、「飛翔」されることを願っています。

株式会社 村上農園 HP：<https://www.murakamifarm.com/>

巻頭言 03

Foreword

教員紹介 05

Faculty's Interview

在学生インタビュー 28

IAS・IGS Students Interview

卒業生インタビュー 40

Alumni Interview

学生独自プロジェクト紹介 49

Original Student Projects

総科の1年 53

IAS Schedule

100号記念企画

『飛翔』のあゆみ 55

History of HISHO

編集後記 57

Editors' Comments



巻頭言

総合科学部総合科学科
人間行動科学授業科目群
大学院人間社会科学研究所 教授

岩永 誠 先生



既成の壁を打ち破り、世界に向かって羽ばたこう

総合科学部創立 50 周年、おめでとうございます。飛翔は今号で 100 号と記念すべき号となりました。毎年 2 号ずつ、学生の皆さんたちが作り上げてきた蓄積が 100 号として結実したことは喜ばしいことです。これまで継続してきた学生の皆さんの地道な努力に敬意を表したいと思います。

総合科学部は 1974 年に教養部を改組して創設されました。教養教育課程と専門教育課程に分かれていた時代に、教養教育と専門教育を統合して教育を行う学部は類例がなく、極めてユニークな存在の学部でした。その当時、文系と理系を共に学べる学部（教育学部を除いて）は、東京大学教養学部と広島大学の総合科学部だけでした。総合科学部の学位は、現在では学士（総合科学）となっていますが、発足当時は東京大学教養学部と同様、教養学士でした。

総合科学部の創設当時は、地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学の 4 コースから構成されていました。学生は各コースの中核的授業を取りつつ、他コースの授業も自由に履修することができ、自らの総合科学を構築できる体制が整えられていました。ちなみにその当時の必修科目は、プログラミング通

論と現代思想でした。当時の先生方が学生に何を期待していたのかがよくわかる科目といえます。

その後多くの大学で学際系学部が誕生したことを考えると、総合科学部は時代の先駆け的な学部であり、社会から求められていた学びを提供するカリキュラムをいち早く取り入れていた学部だといえます。現在の総合科学部は、英語で学ぶことのできる国際共創学科を加えた 2 学科体制となり、さらに多様な学びのできる学部へと発展しています。50 年前に総合科学部を創設した先人たちの熱き想いは、今なお継承されています。

私は、1978 年、第 5 期生として総合科学部に入学しました。九州の南東部の出身である私にとって、広島大学は聞いたこともない大学でした。理系コースにいた私は歴史が大好きだったので、歴史も勉強してみたいと思っていました。それができそうな学部が総合科学部だったので。ここしかないと思って進学をしたわけですが、現在は歴史とは関係のない、心理学を専攻しています。なんと、私は大学に入るまで心理学という学問があることを全く知らなかったですし、1 年生の時も心理学の授業を受けて

いません。それでも理系の授業を取りつつ、人間行動で開講されている授業をとっていたところ、心理学の世界に身を置くことになったのです。これができるのも総合科学部だからだと思います。今は、心理学に転向したことは間違っていなかったと思っています。

人とは何かという哲学的な問いに対して、実験や調査を通して実証的に人間行動を探究していく手法は理系的であり、分析には統計学を用います。実験にはコンピュータを用いますので、自らプログラムを組んで行います。これらをトータルで学ぶことができるのは、総合科学部だからです。私は学生時代、人間行動の授業や実験を履修していましたが、合わせて、情報系の授業や実験も取りましたし、環境科学や社会科学の授業も取りました。これらを学べたことは、人を多角的に捉える視点や研究法、分析法として活かされていると思います。他の心理学者とはちょっと違う心理学を深めることができたのではないかと、勝手に思っています。

総合科学部の卒業生として、4年間総合科学部長を務めたものとして、学生の皆さんに伝えたいことがあります。たくさんあるのですが、3つに留めておきます。

1. ブレークスルーをおこせ

学問の深化のためには専門性を深めることは当然のことですが、それだけでは大きな壁を乗り越えることはできません。新たな展開をするためにも、他の学問分野の考え方や方法論を知り、応用するというブレークスルーが大切です。企業等で新たな取り組みを行う際にも、他の分野との協働は重要です。そこに新しいものを生み出す基盤があるのではないのでしょうか。総合科学部の学生さんたちは、既存の枠にとらわれず新たな地平を求めてブレークスルーを起こしてもらいたいと思います。

2. スーパージェネラリストであれ

社会における問題の解決や課題に応じていくには、単独の専門分野だけでは難しいことが多いため、複数の専門家の協働が求められます。その時に必要になってくるのが、専門集団を束ねるリーダーです。社会の輻輳する課題を解決していくことや、新たなプロジェクトを進めていくには、ジェネラルな知識や視点を持つとともに、専門分野の知識や方法論を理解して調整にあたることのできる人材が求められます。スペシャリストたちを束ねていくためには、スペシャリストを超えたジェネラリスト、つまり、スーパージェネラリストが求められているのです。専門性を深めつつも幅広い知識を持つこと、それは総合科学部でこそ学ぶことができるのです。君たちは、スーパージェネラリストとして、さまざまな課題を解決するチームを束ねるリーダーになってもらいたいと思います。

3. リスクマネジメントに心がけよ

日本はとても自然災害が多く、その被害も甚大です。世界に目を転じれば、戦争やエネルギー問題、食料問題など、さまざまな問題や課題が山積しています。私たちが抱えるリスクは複合的であり、国際的な問題が数多く潜在しています。どのようなリスクがあり、どう対応していくかは特定の学問領域だけでは難しく、実施した対策が新たなリスクをもたらすという、リスクのトレードオフが起きることもあります。社会の諸問題を解決するには、最大利得と最小損失に向けて対策を考えることが求められます。そのためには、広い視野や鳥瞰的視点を持ってリスク評価を行い、対応策を考えるリスクマネジメント能力が求められるのです。総合科学部の学生には、幅広い知識と豊かな想像力・創造力を駆使して、社会に潜在するリスクの評価とマネジメントができる人材になってもらいたいと思っています。

広島大学総合科学部は、「文理融合」を掲げ、多くの学問分野に触れることができる。

多彩な探究領域・授業科目群で教鞭を執られる先生方をインタビューでご紹介。

教員紹介

“宇宙と情報教育”



稲垣
知宏
先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

自然探究領域 数理情報科学授業科目群

情報メディア教育研究センター 教授

—稲垣先生の経歴を教えてください。

僕が広島大学に入学したのが 1986 年で、理学部物理学科というところに所属していました。まだ、情報に関する学部は無く、物理学科に入って、基本的には物理の問題を解くためにコンピューターのプログラミングや UNIX のシステムについて学びました。物理の内容として僕が当時研究していたのは、素粒子物理学と呼ばれるもので、原子核を構成しているクォークやグルオンというものの物理を調べていました。その中で、情報や情報機器、ネットワークについても研究の

必要に応じて学んでいました。僕が大学院の 2 年生の頃に、WEB という技術が使われるようになりました。そこで、僕が研究室のウェブページを作って公開しました。すると、他の大学の先生から「これどうやって作っているの?」と問い合わせが来ました。そんな経緯もあって、広島大学のウェブページを作るなど、情報に関する計画に参加したり、研究したりするようになりました。1995 年に博士の学位を取り、教務補佐員というかたちで、広大の教育室に入りました。そこで具体的に教育室がウェブページとかを作る時のお手伝いや、教育施設のウェブページの作り方のマニュアル作りなどをやっていました。その後、東京大学の宇宙線研究所から研究員の誘いを受けて、そこで半年、宇宙物理の研究を行いました。それから学振特別研究員になって、神戸大学で半年、物理の研究を行いました。そこから、広島大学のメディアセンター（当時は総合情報処理センター）の公募に応募して、広大の総合情報処理センターに入りました。総合科学部には総合情報処理センターから情報教育研究センターに改組して関わるようになったんですね。当時は数理情報ではなくて、物性分野の方で授業や卒論生の指導をしていました。それが 2000 年代で、その後ここ 5 年くらいで数理情報の方に来て、数学とか情報に関わるような学

生の指導をするようになりました。

—先生の研究分野についてお伺いしたいです。

研究分野は、物理学関連と情報処理・情報教育関連の2つがあります。物理学に関連して僕がやっていることは、初期宇宙で何が起こったのか、ということの研究をしています。

宇宙物理について

私は重力の理論について研究しています。わかりやすく言うと、どうやって重力を量子化していくのか、また、重力が量子化されたとしたら何が考えられるかを研究するものです。重力が量子化されたとして、エネルギーが少し下がってきた状態(宇宙の始まりの頃)では、例えば、量子効果のせいでアインシュタインの理論とずれているのではないかと、そういったときにどういったことが考えられるのかについて研究します。

それが実際に宇宙マイクロ波背景輻射という、その宇宙からだいたい 2.7 ケルビンという温度に対応するような波長分布を持ったような光が宇宙の全方向からやって来るということが知られているんですが、2.7 ケルビンと言っても、2.7 ケルビンにぴったりそろっているのではなく、すこし揺らいでいるわけなんです。その揺らぎが生まれた理由と、初期宇宙の理論が結びついているというのが指摘されていて、その揺らぎと矛盾のない理論は何かを調べています。最近始まった重力波の観測にどういった効果が出てくるのかについても研究しています。重力波とは、光が進行方向に対して左右、上下の2方向に揺れる横波なのと似たように考えられて、重力波も波の揺れ方で2つのモードが存在するのです。重力の理論が修正されると、新しい自由度が出てくる可能性があって、その観測にかかるといえるのかかからないのかということを学生さんと一緒に新しい模型を作って、学生ごとに色々新しい模型を提案してくれるので、それは実際に宇宙初期の物理と合う

のか、重力波の検出と矛盾は無いのか、という話をしていたりします。

また、そもそも僕は原子核の中にあるクォークとかグルオンについて研究していました。ですので、クォークやグルオンが温度や密度がとても高くなったときにどういう振る舞いをするのかということの研究している学生さんもいて、それで僕も一緒に研究したりしています。

情報について

基本的に最近進めているのは情報の教育に関する話です。僕は情報処理学会の情報処理教育委員会というところで、今後、日本の情報教育をどう進めていくべきかについて検討議論しています。その中にはいろんな委員会があります。例えば初等中等教育に関する委員会、大学の一般情報教育に関する委員会、社会人の教育に関する委員会などですね。それらの委員会を取りまとめながら、日本の情報教育というのがすべての世代にわたって今後どうなっていくべきかということをして学会関係者・日本のいろんな大学の人たちと一緒に議論しています。

また、広島大学で初年次教育も担当しています。その一環で「情報・データ科学入門」という授業のとりまとめをしています。現在、広島大学での情報教育や学生の情報リテラシーがどのようになっているのかを報告し、他の大学の話も聞いて情報教育のやり方を改善していています。例えば、情報・データ科学入門の中で1年生の人は情報教育に関する調査というのをやって、その中で50問くらいのテスト問題を受けてもらったと思います。それはプレースメントテストといって、一般情報教育委員会の中で作成しています。広島大学だけではなく、いろんな大学でも同じものをやってもらっています。また、メディアリテラシーの章ではスマートニュースと共同で作った教材を使いました。インターネット上の情報は玉石混交で、SNSを

使う上で、どのようなことに気を付けるべきか考えてもらいました。

最近は、生成 AI、Chat GPT などいろいろありますよね。そういったもので教育がどう変わっていくか、情報教育がどう変わるかという議論を始めています。物理の理論が現実に関立するのは数十年、数百年後かもしれないですが、情報についてはまさに今関立つこととして議論しています。

—先生の研究概要に空間の方向は3方向ではないのではないかと書かれていたのですが、わかりやすく説明して頂けませんか？

皆さんの感覚だと空間の方向が3つで、時間の方向が1つで、我々はそれを3 + 1次元と呼んでいます。3 + 1次元と考えて、いろいろな実験の中でも矛盾はないのです。究極の理論で重力の量子化をしようとした時に、この3 + 1次元で進めていくと、どうしても解決できない問題がでて来ます。その問題というのが、物理量を計算したときに、いろいろなところに無限大が出てきてしまう（発散する）ことです。多くの理論は朝永さんのノーベル賞とも関係する繰り込みという手法によって、その発散の問題がなくなるのですが、重力の量子化だけ上手くいかないんですよ。

その解決法の一つとして提案されたのが超弦理論で、物質が紐のような構造を持つものでできていると考える理論です。この理論は究極の理論で、重力の発散の問題も解決してくれるのですが、議論を矛盾なく作ろうとすると、3 + 1次元よりもっと大きな次元があるんです。次元を増やすのは時間方向でも空間方向でもいいんだけど、空間方向に余計な次元があると思っています。まだ、実験では実証されてないのですが、余計な次元についての研究も進めています。

—物理の研究を始めたきっかけはありますか？

もともと物理に興味を持ったのは、小学生のときに

「宇宙のひみつ」という本を読んだことがきっかけでした。その本では、ものは光より早く進めないことや光の速さで進むと、時間が遅くなり年を取らないといったことが紹介されていました。それを知って物理って面白いなと思いましたね。ほかにも「銀河鉄道999」や「宇宙戦艦ヤマト」などの漫画やアニメにも影響を受けました。でも、子どものころは、これらのことは難しすぎて私の手の届く分野ではないと思っていましたね。

しかし、大学生になったころには、アインシュタインの理論なども分かりやすく解説した本もありましたし、研究してみようと思いました。けれども、僕の指導教官は量子色論力学の専門で、その分野についていろいろ調べているうちに、自分の興味分野と量子色論力学の両方が関連した宇宙物理学を研究するようになりました。当時は自分の研究分野が世の中で関立つかどうかなどは考えていませんでした。だから、本当に自分が知りたいということで始めましたね。

現在は、僕の研究に興味を持ってくれた学生さんと一緒に研究しています。今年は大学院生さんとスペインに行って、重力関係の理論を国際会議で話す予定があります。重力の理論の方は大学院生さんが発表して、僕はクォークやグルオンの理論を発表する予定です。研究には予算も使わせてもらっているのですが、何らかの形で社会の役に立たないといけません。ただ、重力の理論が直接役に立つというのは、なかなか場面としてないです。

少し前からですが、物理学者として平和にどういう形で貢献できるのかということを考えて、パグウォッシュ会議に参加しています。現在では物理学者だけでなく色々な分野の人が関わっています。具体的には、パグウォッシュ会議の日本支部である日本のパグウォッシュ会議の中で関連する講演会を企画したり、それと関連して物理学者は何をするべきか、というような

形で物理学会の方でもイベントを企画したりしています。現代でもロシアウクライナ戦争が起きていて、核の脅威はなくなりそうではないので、科学者は何をすべきかという観点から議論をし、声明を発表しています。

—最近では生成 AI の発展が著しいですが、生成 AI が教育に与える影響とはどのようなものがありますか。

実際に学生さんたちも Chat GPT などをすでに使っている人が結構いるんですね。この生成 AI による色々な変化というのはもう確実に起こっているし、これは止められないものです。このような現状ですから、皆が上手に使って、今後の世界を築いていく必要があります。

例えば、情報教育の中で大きく変わると考えている一つはプログラミングです。プログラミングの仕方についても生成 AI に聞くと答えてくれます。例えば、プログラムを入れて、このプログラムの各行の意味は何ですかと聞くと答えてくれます。これをうまく使うことによって、より速く自分の目的とするプログラムが作れるといいんだけど、自分が欲しいプログラムを作らせるっていうのはまだ難しいです。このようなことから、これからはプログラミングで必要なスキルが変わってくるかもしれないと思っています。もちろん基礎は変わらないと思います。しかし、どういうコードを組んだらより効率的に書けるのか、自分の目的としたコードをどういう形で生成 AI に手伝わせるのか、サポートさせながら作っていくのか。あるいはプログラムのバグ発見を手伝わせるとかですね。

ですから、生成 AI スキルを持っている人と持っていない人で差が出てくると思います。また、同時に考えないといけないこともあって、何でもかんでも生成 AI に入れると、守秘義務とかそういった問題も発生するわけです。今後皆さんが社会に出たときに守秘義

務とかそういうのを厳守した上で、上手に使っていかないといけない。あるいは Stable Diffusion のようなイラストを生成するものになると、イラストの著作権がまさに問題になっていますよね。何故それが問題になったのか、どこが問題になっているかっていうのをきちんと知りながら使っていないと危険です。これまで以上に皆さんは情報教育の中で注意しないといけないことが増えていると同時に、これまでできなかったようなことも生成 AI のサポートも受けて簡単にできるようになります。これを上手に組み合わせて問題がない形で使っていく能力というのが必ず問われるでしょう。また、教育だけじゃなくて、社会に大きな影響があると思っています。なおかつ注意しないといけないのは、すごく早く変わっていくので、学生に向けては、今どうだというよりも、もっと重要なのは今後変わっていく状況に対応していく、そういう態度を持たないといけないよということにきちんと気づいてほしいですね。

—私は、生成系 AI のことも全然知れていなくて、なぜ、わざわざ利用する能力がいるのかに疑問があります。

そう思うのも無理ないと思います。生成 AI が普及し始めたのもまだまだ最近の話です。だから使わなくても今までと同じことができるんですよ。ただ、それを使うことで今までできなかったことができるようになる。また、そういうことをする人たちが増えていくはずなんです。もちろんそういった場面ばかりじゃないですし、使わなくても大丈夫という人がいても、よいと思います。

ただ、従来の AI は、単純作業やこれまでの蓄積データを元に何かを判断するというに使われると思われてきました。実際にチェスや囲碁や将棋、医療分野で過去のデータをもとに有利に対戦を進めるとか、診療に応用するとかに利用されていました。ゲームにつ



いては微妙ですが、創造的な分野には、なかなか入ってこないと思われていたんです。しかしながら、今ではAIがイラストを書くとか、作曲するとか、小説まで書けるようになってきている。つまり、想定していなかったところにAIが入ってくる可能性も大いにあるわけで、自分の目指す分野では、生成AIを知らなくても大丈夫だという考え方は結構危険なんです。予測が難しい状況なので、そんな中で生きて行くために、こういった技術と上手に付き合わないといけないと思います。そういうのをよく知っている友達を作って、そこから情報を得るというのも手だと思います。SNSでつながって、その発信を見るだけでも、違うと思います。何らかの形で世の中がどうなっているかを知っておいた方がいいです。しかもこういう情報はニュースとか新聞とかよりも、おそらくSNSの方が、話が広がりますよね。僕としては、使いこなせることよりも、そういったことを自分で考えて判断するような態度を身に付けてほしいですね。授業でも、「論文を書くときに生成AIを使うべきかどうか」をグループワークの中で議論してもらいました。そういった議論を今後も続けて欲しいです。

—総合科学部に在籍していてよかったと思うことは？

理学部に所属していたら、自分の専門を深めていたと思うので、情報教育などの活動に参加することはなかったと思います。総合科学部にいることで、情報教

育や平和に関することに日本の最前線に関われることはとても素晴らしいと感じています。

—総合科学部内で他分野の教授と話す機会はありますか？

なかなかそういった機会はないですが、スマートニュースとの教材開発の際、同学年の教授と関わりました。また、彼は広島国際映画祭の実行委員をやっていたので、映画の上映会を企画するときに助言をもらうなどお世話になりましたね。

—最後に、総科生や新入生に向けてのメッセージをお願いします。

新入生の段階で、皆さんはいろいろな夢をもって総科に来ていると思います。理系、文系にとらわれず、幅広い夢を持った人もたくさんいるのではないかと思います。我々総科の教員は、そういった皆さんの夢を何らかの形で実現するサポートをしたいなと思っています。こちらから声を掛けることはあんまり無いですけど、学生さんが訪ねてきて、声をかけてくれるのを待っています。是非我々教員をどんどん使って、自分の夢に近づいてもらえると嬉しい限りです。

稲垣先生、ありがとうございました！

“生物と共に生きる”



久我
ゆかり
先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

自然探究領域 生命科学授業科目群

大学院統合生命科学研究科 教授

—先生の研究について教えてください。

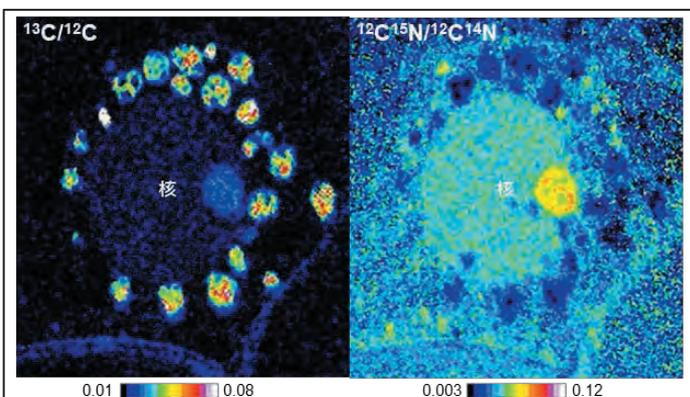
主に植物と微生物の大きな意味でいう共生について研究しています。共生とは、複数の生物が相互関係を持ちながら同じ場所で生活する現象です。双方の生物種が利益を得る関係を相利共生、一方のみが利益を受けるような関係を片利共生といいます。実は病気（宿主と病原体）や寄生というのも、生物学的には共生の形態の一つです（一方に不利益があるが、他方に利益がある関係）。植物と真菌との共生について研究しています。

学問分野としては植物病理学と菌根学で、生物学、植物学、微生物学、生態学などが広く関わります。植物に共生微生物を接種、あるいは感染した個体を様々なアプローチで解析しています。

植物病理学は、植物の病気について病原体（微生物）、発病機作、防除法などについて研究する分野です。私の研究では、病原体が土壌に起因する病気（土壌伝染病害）を対象としています。土壌病は防除が難しく、

不治の病と言われます。この常識を塗り替えようと学生さんたちと研究しています。この研究では主に生態学的な視点で、病原菌の衰退する現象を他の微生物との関係で、どういうふうにお互いが拮抗しているのか、優勢になったのか、その理由などを解析しています。

菌根学は、植物と菌根菌（真菌）の共生（主に相利共生、片利共生、植物による菌への寄生）を研究する学問分野です。私の研究アプローチの特徴としては微生物学的手法のなかでも、とくに顕微鏡法（マイクロコピー）を用いることです。マイクロコピーには形態を観察する光学顕微鏡や電子顕微鏡をはじめ、様々な情報をイメージングする技術があります。解剖学的手法と組み合わせることで、細胞同士の相互作用を解析することができます。例えば、安定同位体の二酸化炭素を植物に固定させて、それが実際に植物の体の中を流れて、根まで来て、そして菌に渡されている過程が見えました、というような分析を行っています。こういう研究は世界的に見ても少ないのですが、学生の皆さんは、生物対生物の闘い、病理学の方に興味を持たれる方が多いですね（笑）。



ランの種子は共生菌から炭素や窒素などを受け取り生長する（共生発芽）。安定同位体を使い、共生者間の物質の流れを細胞小器官レベルで追跡することができる。

共生している菌糸のみに¹³C-グルコースと¹⁵N硝酸アンモニウムを与えた時のネジバナの核とアミロプラスト（核の周りの丸い構造。デンプンを生成する細胞小器官）。菌由来の炭素がアミロプラストに最も集積し、窒素が核小体と核に集積している。

「はやぶさ」って知っていますよね？宇宙の隕石の研究をしている方々と共同研究をしています。彼らは太陽系の起源を探るため、隕石の同位体をイメージングする機械（同位体顕微鏡）を開発されたのですが、生命科学にも適用できるということで2010年くらいから使い始めました。

だから研究手法が多岐に渡っていて、どんな研究をされていますかという質問には答えにくいんですよ（笑）。

一顕微鏡を専門領域でその手法として取り入れられています。そこに至った経緯があれば教えてください。

それについては、植物病理学で酵素活性による反応産物を組織（光学顕微鏡）あるいは細胞（電子顕微鏡）で検出し、酵素の局在を明らかにする方法である酵素細胞化学を始めた、という背景があります。当時は細菌による複合病に取り組んでいたんです。複合病とは、病原菌が一つの病気に関与しているものです。菌を分離してそれぞれ接種すると発症します。病気が起こる原因を病原菌が持つ酵素から解析していたのですが、なかなか説明がつかなかったんですよ。

行き詰まり、「答えは現場にある」と、病気が起きている組織を観察する実験に大きく方向転換しました。そうしたら、同じ経路で病気が起きていると思っていたのに、そのプロセスが違ったんです。ある病原菌は



透過型電子顕微鏡



担子菌と共生発芽しているネジバナの
プロトコーム

細胞を溶かしていたのに、ある病原菌は細胞を殺していたんです。「見る」ということの重要性に気が付いた最初の経験です。それでその後博士に進む時は、菌根（相利・片利共生系）の研究を始めたんですけど、やはりまず、「見る」ことから始めました。

この前「総合科学へのいざない」（総合科学科1年の専門科目）でお見せしましたが、うどんみたいな菌糸が植物の細胞の中一杯に詰まりながら、お互いが生存しているという驚き。あれは今見ても…。

「見る」ことは、ものすごい洞察を引き出してくれます。目で見ただけの情報というのは複雑で解析は難しいですけど、見えたことにはパワーがあります。



果樹類白紋羽病菌の菌糸体

一久我先生は総科のプロジェクト（※）をされていますが、応募に至った経緯を教えてください。

総科のプロジェクトは、主に植物病理学の研究テーマですが、土壌の微生物群集は遺伝子を手掛かりに調べることができます。ところがこの方法では、原核生物用と真核生物用のプライマー（遺伝子を検出するためにDNA複製の起点となる短鎖DNA）が異なるため、データが二つの生物群に分かれてしまうのです。それらは共存しているのに、グループ間での比較、関係性がわからない。すべての方法論には長所と短所が

あります。そこで、相互作用の解析に、表面張力や、理論物理学など、新たな視点を取り込みたいと思い、総合科学推進プロジェクトに応募しました。

※ 総合科学推進プロジェクト:文系と理系にまたがる共同研究をはじめ、さまざまな形の総合的、学際的研究を推進し、総合科学部の教育・研究における学際性、総合性、創造性の推進に資することを目的とした研究プロジェクト

—総合科学部に所属していたからこそ、解決できたのかもしれないですね。

総合科学部では色々な分野の先生がいて面白いです。全く違う分野の先生と話すきっかけがあるのはいいですね。新たな知見が得られます。

—他分野の先生との共同研究についてもお聞かせください。

違う分野の先生と一緒に研究して行く上で、色々な驚きがあります。

まず、同じ言葉でもイメージすることが違うことがあります。例えば、「構造」というと、私にとっては、組織や細胞であり、ミトコンドリアや核などの細胞小器官です。一方、材料系の方は「構造」と聞くと、結晶構造を浮かべられるのです。こういった認識のすり合わせが大切です。

一番大事だなと思うのは、結局、人間と人間の共同研究であるということです。お互いの分野が異なるときは特に、両サイドがリスペクトの心をもって、自分の疑問点を勉強し、それでもわからないことは相手に聞きくことが重要です。

—先生は今まで多様な研究をされてきたと思うのですが、その経験から学んだことはありますか？

経験から学んだことですか…。実験するときには必ず何か得るということでしょうか。戦略をもって臨んで

も、ダメなときはあります。ただそこで簡単には引き下がらず、これがダメだったら次という風に仕掛けていく。ダメなことからヒントを得る。上手いかない、あるいは上手くいったときに(そもそも“上手くいったのかどうか?”)、その理由を考えるのは、文系理系関係なく重要ですね。

実験というのはトライアンドエラー。楽しいですよ。私、学生の時に実験は、もう何度でも何度でもやりました。もちろん今でも繰り返します。特に酵素細胞化学ではすごく苦勞しました。遠回りしたと思いますが、その時の試行錯誤が私の研究の基盤を作ったと思います。

—専門の異なる研究者同士の共同研究は、それぞれの分野の視点を話し、最終的には一致するものを共有するという事なんですか。

多分そうなんですよね。それぞれのプロフェッションを持ち寄って、リスペクトしながらプロジェクトを進めるとお互いに発見があります。この構造は社会の様々なところにもありますよね。

科学とか勉強のおもしろいところは、幾つになっても発見があること。皆さんもどの分野に進まれても、発見する、理解する喜びを探究してってもらいたいです。



久我先生、ありがとうございました！

“違う文化圏で「住む」体験を”



進学先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

社会探究領域 越境文化授業科目群

大学院人間社会科学研究科 教授

—先生の現在の研究内容について教えてください。

広く言うと、キリスト教の研究者であるけど、その中でも新約聖書を専門に研究をおこなっています。新約聖書について、どのようなことが書かれているか、キリスト教がどのようにして始まって、どういう宗教として発展したのか、というようなことを調べるのが研究内容であり、また本職でもあります。

—その研究を取り組み始めた経緯や動機を教えてください。

僕は父親がキリスト教の牧師だったからずっとキリスト教の教会の中で暮らしていました。神戸で生まれて、生まれてから3年くらいは教会付属幼稚園の園舎の2階に住んでいて、3歳で宝塚市に引っ越してから教会内に住んでいて。それから、高校から大学に進級するときに、将来何をするか決めていく段階で、なんとなくサラリーマンになるイメージができなかったんです。父親が牧師をやっていたのもあって、牧師さ

んの仕事しか選択肢が思いつきませんでした。大学は神学部に行って、牧師になるための試験の勉強をして、大学院まで進学したんだけど、その期間に研究の方が面白いと感じるようになりました。そもそもキリスト教って何なんだろうって自分で調べて、知ってみたいになりました。それまで、親がキリスト教ということで当たり前にあるものだったから、自分なりに調べてみたくなくて研究者の道に進みました。

最初のキリスト教がどのように始まったかを調べたいと思ったので、新約聖書に書かれたイエスのこととか、その後のキリスト教の発展について、新約聖書を手掛かりに分析する新約聖書学をおこなうことにしました。その研究が面白くなって新約聖書の研究を進めていくようになりました。

新約聖書の研究は歴史的にキリスト教とはどういうものかを調べるから、歴史学でもあるんです。また、別に信仰している人だけが学ぶわけじゃないから、広島大学のような国立大学でも研究が出来ます。広島の総合科学部は、創設してからずっと、聖書の研究を教える先生がいるんです。それで縁があって現在は広島大学で研究しています。今は聖書学が公民の教員免許の教職科目に指定されているのもあって、2年生以上を対象に開講している聖書学の授業には毎年40人〜50人程度参加してくれています。教職のためだけでなく、信じている、信じていないに関係なく、キリスト教について知りたいと思っている学生にキリスト教の話や聖書の話をしています。

—伝道師としてのお仕事についてお聞かせください。

伝道師というのは牧師さんのことなんです。牧師さんになるためには最初の試験を受けた後に伝道師にな

れて、もう一回試験を受けると、正規な牧師ってことになるんです。自分も教会の日曜礼拝とかの仕事をやっていた時もあるけど、今はほとんどやってないですね。時々、キリスト教会に呼ばれて、日曜礼拝で話をしてほしいと言われることがあるので行ってはいます。牧師さんが人手不足なので(笑)。牧師さんのいない教会も結構あるんです。プロテスタントの礼拝をする教会では、“説教”って言って、聖書の解き明かしみたいなものがあるって、それをやってほしいって言われて月に一回か二回行くことがあるくらいです。

一伝道師の時と、牧師の時のできることの違いはあるのですか？

教派によって変わるけど、違いはあります。僕は、日本で一番大きい「日本キリスト教団」という教派の信者なのですが、そこでは、伝道師には洗礼というクリスチャンにする儀式ができません。あと、聖餐式と言って、パンと葡萄酒を与える儀式もできない。だけど、結婚式とかお葬式とかはできる。僕は、結婚式を150~200くらいはやったことがあります。以前いた関西学院大学はキリスト教の大学で、学内にチャペルがあって、卒業生が結婚式を挙げることが多いです。10年務めていたので100回くらいはやりました。できることできないことで2つの段階に分けられるけど、「教会で牧師さんの仕事をしている人」でまとめられることが多いと思います。

あと、どうやって牧師になるのですか？という質問をされることが多いけど、自動車の免許の試験みたい

な感じですよ。教派によって試験をするのですが、学科の試験がたくさんある。ただし、指定された大学を卒業すると、科目免除もあります。普通にサラリーマンして、定年になって、第二の人生として牧師になる、みたいな人やそれまで教会の信者さんで第二の人生で牧師になるという人も時々いて、そういう人が大学の神学部で学んでいることもあります。

一先生は神が本当に存在すると思いますか？

面白いこと聞くね(笑)。個人的には、「いると思っている人にはいる」と思います。難しい言い方すると、解釈原理だと思っています。つまり、神という存在がいて、この世界の過去から現在とか宇宙とか、全部ひっくりかえって、ちゃんと秩序がこの世界にあって、保たれている。この世界は無茶苦茶じゃなくて、ちゃんと季節が春夏秋冬の順で変わっていくとか、天体がちゃんと動いているとか、生態系がちゃんとあるとか、人間にもその中でちゃんと役割があるとか、などの秩序があって、それに適うように生きていったら人間が幸せになれると考えている。僕たちは今、そういう秩序を信じて生きているわけです。もしそれがなかったら、明日何をしたらいいかも分からないわけで…。そういうのがあるから、大学で4年間勉強して、4年先にはこの社会はしっかりとあるし、就職した後も社会の中で働いていて、自分の人生が想定したように続いていくんだろうと信じられるわけです。でも、それは保証されていることではなくて、信じていること以上のものではない。信じる一つの表現として、神様がいて、この世界をそういう風に良く造っている。キリスト教の神以外にも、神様と言われるもののイメージを信じているのは秩序への信頼とか、その秩序であってほしいという希望などの表現であるから、このような意味で、「神を信じている人にはいる」と考えています。



一辻先生自身はどのようにお考えですか？

今言ったようなことは信じています。だから、キリスト教の神の表現っていうのは、一つの表現の仕方であって、あくまで人間がイメージしたことで、キリスト教の神というものも、人間がイメージした神だと考えています。本当にいたとしても、キリスト教が言っている通りにいるとは限らないと思います。もし、神が誰か分かっていたら、人間が神ということになる。それが本当にいるとしたら、人間の思うように動いてくれる人形でしかないということになると思います。神は人間の思うようになんて動かないはずだし、神が何を考えているかなんて、人間は分からないはずで。だから、本当は人間が考えているどんな宗教であっても、神は宗教が考えているものとは同じような存在ではないんだろうなとは思っています。でもだからと言って、もう神をイメージしない、違っているから考えない、ということもできない。この世界はきちりできているはず、上手く動くように秩序があるはずということ、やっぱり信じて生きているからね。反対に、この秩序みたいなものが信じられないほど、無茶苦茶な状況にいる人ほど、それを希望として信じたくなるとも思います。戦争とか、自然災害とか、神様がいるのになんでこんなことが起こるのか、ということも起こっているわけだけど、そのような状況にいる人ほど、希望を持とうとして、神というものを求めていると思います。神なんか別に信じていなくても、私は幸せに生きていると思っている人は神様なんて信じていないと思う。結論としていえるのは、神を信じるということは、それを信じて行動する人のところには存在するという感じだと思います。神が存在するということを客観的に言えるかどうかは分かりません。神がいるかいないかよりも、神を信じることで人間の生き方がどう変わるかの方が大事なはずで。

一最後に、学生のうちにやっておいた方がいいことや、アドバイスなどがありましたらお願いします。

大学では、教えられたことを覚えていく以上のことをすると思います。自分で問題を見つけて、それを解決していくっていう力が求められているので、何が問題か、自分が調べるべきことを発見する力が必要になってきます。そのためには、それまで疑問に思っていなかったことを疑問に思う力が必要です。それはいろいろなことを経験する中で初めて出てくることなので、いろいろな人と話をするとか、いろいろな人と会うとか、いろいろな違う場所に行ってみるとか、そういうことが良い刺激になると思います。例えば、外国に行ってみて初めて日本での行動に疑問を思うようになることもあります。日本で建物に入る時に靴を脱ぐのは何でなんだろうか、とか…。このような意味では、色々な経験をした方がいいと思います。大人になってもこの経験はした方がいいけど、学生はまだ時間があるので。僕は自分が外国に行ったから思うけど、長期で外国に行く経験をする方がいいと思う。長期は仕事を始めるとなかなかできないとも思うので。違う文化圏の国で“住む”という経験をした方が新しい発見のチャンスが増えると思う。



辻先生、ありがとうございました！

“学問・人生は「地図のない航海」”



松嶋
健
先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

社会探究領域 社会フィールド研究授業科目群

大学院人間社会科学研究所 准教授

一大学のホームページの先生の紹介を拝読したのですが、先生の専門である文化人類学について『「驚き」を大切にする学問』と表現してらっしゃったのがとても印象的でした。

そもそもScienceとは、「科目の学」で「科学」と訳したわけです。Scienceは成り立ってきたわけだけども、現実の出来事はそんなふうに分かれてはいない。ある出来事なり現象に驚き、それを理解したい、もっと知りたいと思うところから、じゃあどんな切り口やアプローチだといいいのか考えるわけです。最初から〇〇学を勉強する、ということではなく、はじまりに「驚き」や「センス・オブ・ワンダー」があって、そこから問いを深めていくために〇〇学を学ぶということです。そして、いろいろな学問やアプローチがあるなかで、これを使うとより物事がよく見えてくる、より解像度が上がるというものを選んで学び、使いこなすのです。それは、大海を航海する「船」のようなものです。

でも、行き先が最初から決まっているわけではなく、ただなんとなくあっちの方角に行きたいという感覚だけがある。そうするとそちらの方角には、途中で様々な島があり、港があって、そこにはいろいろな海を航海してきた船乗りがたくさんいるわけです。それは「先生」というより「先達」であって、そこに行くと、あのあたりの海は潮の流れが速くて危険だとか、あっちの方角へ進むとこんな島があるという話を聞くことができる。それで実際に自分でも船を出して進んでいくと、また別の出会いがあって、進む方向が変わったりする。そんな風に港に寄りながら進んでいくうちに、次に自分がどっちに進むべきかが見えてくる。

最初からやりたいことが決まっているというのは、すでに地図があり、目的地があるという状態で航海をするようなもの。でも、学問や人生というのは、地図のない航海だから、ある地点まで進んでも、その先がどうなっているかはわからない。未知の海で航海を続けていくためには、「こっちに行くとか何かありそう」とか「こっちに行くとかあぶない」といった感覚がとても大切になってくる。多くの港に寄って様々な情報を仕入れるのも大事だけれども、それだけでは不十分で、自分のなかの感覚を羅針盤にしながら、同時に複数の航海術を学んで、そのなかのどれを使って進んでいけばよいのかをいろいろ試してみることができるのが大学という場の面白いところだと思う。

私も「文化人類学」という学問をやっていますが、文化人類学自体、一つの学問領域というより、複数のアプローチの交叉という性格があり、その見方を身につけると、世界を見る解像度が上がるとともに、航海

するのがますます面白くなる、そういうところがあります。自分が知っていると思っていた、あるいはそのように教えられてきたものとは全然違う、現実の潜在的な次元が見えるようになってくる。そうすると、ますますこの世界は知らないことばかりだということに気づき、実際に現場に行ってみて、話を聞いたり、さらに勉強したりする。こうした過程は、私にはやはり一種の航海のように感じられます。

これは別に、専門の研究者にならなくても同じことだと思います。〇〇学が専門、というようなことではなく、最初に驚きや不可思議の情動があつて、それを「問い」のかたちにして深めていく過程で、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなったり、別の姿が見えてきたりするのです。そのように世界がまったく別の様相で立ち現れてくるというのが、学問をすることの醍醐味だと思います。そうでないと、ずっと自分が現実だと思っているものの枠組みやゲームの中でだけプレイし続けることになるからです。

そのとき重要なのが、「出会い」だと思います。それは、人でも本でも出来事でもよいのですが、自分を揺さぶるような出会いがある。揺さぶられることは、不安になることだし、快いものでは決してないかもしれませんが、そのせいで考えざるを得なくなる。だからそれは、快適な部屋で椅子に座って、何かについて考えてみようというようなものではなく、否応なく思考することを強いらられるような経験なのです。「出会い」を通して、今まで見えなかったものが見えてくるということは、思考しているのが「私」なのではなくて、「私」を超えたものが「私」において思考しているということです。そのようにして自己は変容を遂げながら、航海は進んでいくのです。

一学生のうちにやっておくべきことはなんだと思いますか？

これをやっておいたほうが良いというより、こういうふうにしなないほうが良いということを知っておくことのほうがはるかに大事です。それは、入学したときから就職を見据え、逆算して今やることを決めるというような生き方です。今の自分から見えているゴールから逆算して、やることを決めてしまうと、自分でも思ってもみなかったような新たな出会いや道が到来することは、極端に難しくなります。何か、自分でも考えたことも想像したこともなかったものが到来してくるのをキャッチするためには、それに応じられるような開かれた構えが必要です。そのような経験にいつでも自分を開いておく、いつでも準備できているという状態にして待つ、ということが、学生にとっておそらく最も大事なことなのではないかと思います。特にこれからのますます不透明で不確実な時代においては。

一どうしても何かを決めないといけない時、まだこれというのがないこともありえると思うんですが、その時はどう選択するべきでしょうか？

迷うのは、選択の余地がないところまでまだ至っていないからです。だから選択肢が複数あるように見え、その地点にいるから迷うのです。特に、子供の頃から複数の選択肢の中から何かを選ぶという、いわば消費者として主体化してしまっていると、いかにベストな選択肢を選ぶかという発想しかできなくなってしまう。しかし、世界や人生はスーパーの商品棚ではありません。複数の選択肢の中からよいモノを選ぶ、というのではなく、「最早これしかない」というところまでプロセスを推し進めなくちゃいけない。

もちろん社会的には、この時まで決めなさいという締切りのような制度がありますが、それも人間同士が決めた約束事にしかすぎないわけで、生のプロセスというのは、そのような社会的な次元のことに影響されつつも、それだけに回収されることのない次元で進行していきます。そのプロセスをきちんと生き、選択の余地がないところまで推し進めることが許されるような場として、大学とか、総合科学部というような場が設けられているわけです。心ゆくまでそのようなプロセスに身を任せてみると、人は信じられないほど遠くまで旅することができます。目的地から逆算し、効率的にたどり着くような発想では、驚きとともに訪れる深い喜びに達することは難しいと思います。

—やりたいことがありすぎる場合はどうしたらいいと思いますか？

やりたいことがたくさんあると思っているのは、まだ旅を始めていないから。ここに行ってみたい、でもあっちもいいな、というような状態。でも、いざ旅を始めてみると、全く予想もしていなかったような展開が待っている。それは決して出発地点からは見えない。逆に言うと、出発地点から見えているものなんて、たぶん本当にやりたいことじゃないのだと思う。それはいわば「憧れている」だけです。

でも、「これだけは譲れない」というところから一歩踏み出し漕ぎ出すと、あたかも運命の歯車が回転しだすかのように展開していく。逆に言うと、そういう一歩を踏み出す情動を揺さぶるような何かに出会えるかどうか、何よりも大事なことではないかと思えます。

—総合科学部に入りたいと思っている学生に向けたメッセージはありますか？

ここは楽しいよ、ここに来るといいことがあるよ、というようなことは言う必要がないと思う。縁があれば来るだろうし、そうするとその時点ですでに航海は始まっているわけです。

大企業だから安泰だと思っていたようなところが逆に最も不安定になって、いい大学に行ってもいい会社に就職するというような従来の考え方では、ちゃんと感じ考えないと生き延びることさえ難しい時代にすでに突入していると思います。

こういう職業につきたいとか、こういう会社に入りたいというこれまでの社会の中での選択肢は、かなりの程度、無効になる。選択肢がないところで、選択肢の外を考えながら生きていくことが問われることになるでしょう。それはもしかすると、しんどそうな道、一見楽しくは見えない道かもしれないですが、より深いところで生きていると感じ、深い喜びを感じられる道かもしれない。そうした感覚を磨き、それを羅針盤としながら、その感覚を信じてそっちに船を漕ぎ出せるかどうか分かれ目です。決断というのは、決して選択ではなく、前に一歩踏み出すこと。そのセンス（方向＝感覚）を育てていってほしいと思います。



松嶋先生、ありがとうございました！

“スポーツ心理学と総科の魅力”



関矢
寛史
先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

人間探究領域 スポーツ健康科学授業科目群

大学院人間社会科学研究所 教授

—関矢先生の研究の内容について教えてください。

専門はスポーツ心理学です。今まで一番多くやった研究はプレッシャー研究ですね。プレッシャーがかかるような状況での人間の心理状態や体の動きにどんな変化が生じるのかということを中心に調べています。ここ2、3年では、興味を持って新しくスポーツパーソンシップの研究を始めました。スポーツマンシップって言った方が分かりやすいですかね。例えば、相手にヤジ飛ばしたり、ドーピングをやったり、ルール違反をこっそりやったり。スポーツの高潔さを脅かすような様々な問題が新聞やテレビ、ネットで取り上げられるようになったので、それらの問題をどうすれば減らすことができるかという研究です。

—どのような経緯でプレッシャー研究をしようと思ったのですか？

私の場合、自分自身がスポーツの試合に出た時にプレッシャーや緊張で普段通りにプレーできなかった経

験が数多くあったので、プレッシャー研究に興味を持ちました。どうすればプレッシャー下でもいいプレーができるかということに疑問を持って始めました。

—野球の大谷翔平選手が、試合前でも明るく振舞い、チームメイトとコミュニケーションをとる場面をよく見るのですが、これはプレッシャーを抑制するための行動なのでしょうか。

あくまで私の推測ですが、プレッシャー抑制の効果があると思います。専門用語を用いると、自分の振る舞いが他人の心理状態に与える効果を対他効果、自分の振る舞いが自分自身の心理状態に与える効果を対自効果と言います。おそらく大谷選手は、チームメイトを盛り上げて彼らの心理状態をより前向きに持っていく対他効果と、明るく振舞うことで自分の心理状態を前向きに持っていく対自効果をうまく利用しているように思います。

—スポーツにおける自己暗示に興味があるので詳しく教えてください。

自己暗示は、アスリートに対するメンタルトレーニングの一種として取り入れています。でも実は、自己暗示が1番研究されたのは、医療の分野なんです。プラセボ効果って聞いたことがありますか？本当は病気を治療する効果がない薬でも、服用させると心理的な症状から身体的な変化まで起こるという効果のことです。このプラセボ効果は、暗示の効果が発生しているんです。この場合、自己暗示と他者暗示との両方が入っています。薬だけではなくて、外科的な治療においても、治療によって怪我や病気が回復すると信じている人は本当に症状が良くなるというように、高い効果

が認められています。しかし、医療の分野では、治療効果があっても、その効果がプラセボ効果と同等の場合、その治療方法はプラセボ効果ほどの効果しかないから、という理由で不採用になるんです。

一方、スポーツの分野では、プラセボ効果のような自己暗示を積極的に利用しようとしています。言い換えれば、いい意味で自分の脳をだましていく考え方ですね。自己暗示は、現在のドーピング違反の項目に含まれていないので、実験的に検証されている自己暗示の効果をどんどん利用していこうという動きになっています。

一先生が留学時代に研究されていた、運動制御、運動学習について、詳しく教えてください。

運動制御とは、自分の体をどうコントロールするかという研究で、そのコントロールをするために必要な学習や記憶が運動学習です。初心者は動きがぎこちないけど熟練者はスムーズに動けるようになる。これは、時間や経験を積んで運動制御のやり方を学習したからなんです。アメリカのルイジアナ州立大学の大学院に留学して、これらの研究を行っていました。

特に、文脈干渉効果の研究を行っていました。文脈干渉効果が表れるスポーツの練習法として、ブロック練習とランダム練習というものがあります。具体的に話しますと、スポーツにおいて複数の技（A、B、C）を練習する場面を想像してください。テニスであれば、クロス、センター、ストレートのようなコースの打ち

分けが挙げられます。この時、ブロック練習は、Aを30回、次にBを30回、最後にCを30回練習する、とブロックに分けて練習する方法です。この練習法は一般的に多く使われています。一方、ランダム練習ではA、C、A、B…というように、無作為にランダムな順序で練習を行います。これらの練習を行った結果、練習中はブロック練習の方が速く上達しました。しかし、3日、1週間と時間を置くとランダム練習を行った人の方が、技が定着していたんです。ランダム練習は、練習中はなかなか上達しないのですが、学習の効果は非常に高いんです。

私は、このランダム練習が総合科学部での学習に似ていると思うんです。専門の分野に集中して学習するブロック条件的な他学部と比べて、総合科学部は多様な分野をごちゃ混ぜな順番で学習しています。だから、総合科学部の学生さんたちは、勉強中に苦しくて手こずってしまうことがあるかもしれないのですが、そこを乗り越えて他の事柄と関連付けたり、新しい場面に適応したりする能力を身に付けてほしいと思っています。こんなところで自分が大学院生時代にやっていたテーマと、総合科学部のあり方っていうのが繋がっていて、総科に来て良かったなと思っています。



ースポーツ心理学のどのような点に魅力を感じていますか。

私はスポーツ科学を心理学的にアプローチしているのですが、たまたま対象がスポーツという現象であっただけで、あまりスポーツにこだわってないんですよ。スポーツは日常生活に比べて非日常的で感情が揺さぶられる場面が多いと思います。例えば、試合で緊張したり、チームメイトと意見が分かれたり、試合ですごく感動して泣いたり、人を応援したり。スポーツ限定でなくて、このように感情が動く場面で人間の本性が出ると思うんです。ですので、人間の本性を明らかにする、すごくいい題材がスポーツかなと思いました。スポーツにおいて、人間が緊張して動きが縮こまることや、試合の戦略でリスクを取らなくなることは、人間の本性からきていることが多いんです。だから、スポーツという題材を通して人間の本性を調べているのがスポーツ心理学の魅力ですかね。

一関矢先生は今年度(令和5年度)まで総科の学部長をしていらっしゃるようですが、研究者としての仕事と学部長としての仕事の両立でご苦労されていることはありませんか。

苦労していることは特にありませんね。むしろ、学部長になると、いろんな教職員の皆さんとコミュニケーションをとる機会が増えるので、嬉しく思っています。学部長になる前は個人的に知らなかった先生方とも知り合いになれて、「この先生こんな研究やっているんだ」とか「こんなテーマでやっているんだ」とか、そういう事を知る機会が増えました。そういう新たな発見は自分の研究にも役立つので、全然苦労はないです。

一先生の思う、総科の良いところを教えてください。

総合科学部のいいところは、自由度が高いところですね。大学に入学してから一年間、何を学ぶかを決める猶予があるので、総科には初めからやりたいことを見つけて入学する人と、じっくり吟味したうえでやりたいことを決める人がいます。だからカリキュラムも柔軟で、他学部と比べると授業の取り方もかなり自由度が高くなっています。ですので、自主的に学びたいことがある人にとってはやりたいことを実現できる学部です。逆に、色々な分野に興味を持ちすぎて決めきれず、道に迷ってしまう学生さんもいます。そこは注意が必要ですね。いつまでも迷わないように、ある程度エイヤって決めてやってほしいなと思います。

また、総科のカリキュラムについて、柔軟で自由度が高いと話しましたが、2年前に学生さんたちがどのくらいカリキュラムを有効活用しているか調べたことがあるんです。総科では、「自分の授業科目群からのみ授業をたくさん取って、他の領域に関しては、とらなければならない最低限の数しか取らない」という戦略も可能になっています。そこで、他領域の授業を最低限の数のみ取っているのか、積極的にたくさん取っているのかを、過去3年分のデータを使って分析しました。その結果、かなりの人がカリキュラムの最低限の数をはるかに超えて様々な領域の授業を取っていることがわかりました。それを知ってとても安心しました。

あと、皆さんが卒業して同窓会などで同級生に会う際に、色々な業種の人たちが同窓生にいることも総合科学部の良いところだと思います。マスコミの人もいたり、公務員もいたり、教師もいたり、いろんな人がいるので、それが総合科学部の卒業生の財産になっていますね。

一関矢先生、ありがとうございました！

“心理学は日常に疑問が転がっている”



坂田
桐子
先生

総合科学部 総合科学科 (IAS)

人間探究領域 人間行動科学授業科目群

大学院人間社会科学研究所 教授

—先生の研究内容を教えてください。

主にリーダーシップとジェンダーについて研究してきました。リーダーシップや集団の運営の派生で集団行動なども研究したことがあります。最近だとダイバーシティ&インクルージョンに対する関心が社会ですごく高まっているので、多様性と包摂性の問題にも少し関心を持っていて、中でも包摂性が個人と集団に及ぼす影響や、あるいは包摂性を高めるために何をしたらいいのかというようなことについて研究しているところです。具体的に言うと、社会的に理想とされる包摂性が高い状態が本当に良いものなのかというところを実証的に研究していくということと、その包摂性の隠れた弊害も見つけていきたいなと思っています。どのようなリーダーシップで一人一人のメンバーが包摂感を受けることができるか、包摂性を高めるようなリーダーシップを発揮することで集団の生産性が向上するのか、を含めて研究したいです。

—研究のきっかけというのは？

元々リーダーシップについては子供の頃からずっと関心がありました。小学校の頃から学級委員等の集団のまとめ役をやる経験があり、多くの人をまとめることが難しいと感じていましたね。また、大学に入った途端にリーダー役になる女性が激減する現象を目の当たりにして、こんなによくできる女性たちが集まっているのになぜ？みたいな疑問もありました。そして、私が院生になった頃にちょうど男女雇用機会均等法ができたんです。研究テーマを探しているときに、そこに日頃からの疑問が重なって、リーダーシップとジェンダーというテーマで研究してみようかなと思ったのがきっかけですかね。

—研究テーマとなる疑問はどのような場面から生じるのでしょうか。

心理学の特徴かもしれないですが、社会心理学は対人関係や人間関係の心理学のような部分があるので、他者と関わる中で素朴な疑問が湧いてくるんです。日常生活のどこにでも疑問が転がっています。大学生の頃はそれを研究の形にするのに苦労していましたが、慣れるとできるようになりました。

—日常の疑問を研究に落とし込むコツがあれば教えてください。

最初はすごく難しいと思います。でも文献を読むことから始めて、一方で自分が日常的に疑問に思うことを疑問形で書いておく。そして、そこに関係ありそうな分野の論文や本を一生懸命読んだら、どこかでその疑問に引っかかる部分が出てくるんですね。過去の研究を手掛かりに、自分の疑問を研究の形にしていく感じですね。

—ありがとうございます、参考にさせていただきます。

人間関係について研究されている坂田先生ご自身が集団の人間関係に悩まれた経験はありますか。

小学校の時から学級委員などをする中で沢山感じることはありましたね。私自身も無視や悪口、仲間外れなどのターゲットになったことがあったんですけど、どうしてそうなるのかなとか、それに対する担任の先生の対応などに疑問を持ったことはありました。心の中ではおかしいのではと思っていて、そういう疑問が研究に繋がっているんだと思います。でも、クラス替えて環境が変わってすごく快適に過ごせたので、やっぱり環境は大事だなと思いますね。ジェンダーに関しては大学に入ってから、自分自身が女性だからといって腑に落ちない扱いを受けることもあって、納得いかずに悩んだこともありましたね。

—教師がとるべき行動はありますか。

教師が気を付けなければならないのは、俗に集団心理といわれるような多数派に同調することが生まれやすい状況の時に、そういうプロセスで出された意見を鵜呑みにしないことや、本音を言いやすい環境を作ることですかね。大人の集団でも多数派に同調する問題は話し合いの質を下げることが多くの研究から分かっています、やはり最初に多様な意見が出るということがすごく重要。いろんな意見を丁寧に吟味して検討して、良いアイデアを作ることが必要なので、やっぱり安易な同調っていうのは防がないといけないですね。

—坂田先生が研究されている、「個人も集団も幸福な状態、個人が個性を発揮し集団が機能する状態」とは具体的にどのような状況を指しますか。

集団が集団目標をきちんと達成できていて、なおかつ人間関係も良い状態です。仲良しという意味では必ずしもなくて。目標に向かってみんなが協力し合い、

個々人もその集団活動にやりがいを感じていて、成長を実感しつつ、自分の生活にその集団生活も含めて満足できている状態です。多くの場合集団目標が達成出来たら、その成果は個々人のメンバーに戻ってくるところがあると思うので、集団目標も達成出来て個々人もやりがいを持って活動できる状態がすごく大事だと思いますね。

—その状態を目指すために、集団の一員として我々にできることはありますか。

そうですね、集団の状態を左右するリーダーシップの在り方については研究で明らかになっているんですよ。個々人がということになると、自分がやりがいを持てることが重要です。あとはできれば集団目標に貢献しようという意欲を一人一人が持てると集団の目標達成はしやすくなるので、そういう気持ちを最低限持つということが重要かなっていう気はしますね。

—どのような年齢層を研究対象としていますか。

決まってはいいのですが、大学生以上を対象とすることが多いです。企業で働いている人を対象にすることもあるので、60代くらいまでの人が多いですね。

—ご自身の研究と社会の結びつきや社会貢献について考えたりされますか。

それはすごく意識しています。やっぱり研究は研究者の自己満足のためにするものではなくて、社会で役に立つようなことをしたいなと思っているんですよ。私の研究で役立つことというと、リーダーシップに関する知識や女性のリーダーがなぜ増えないのかというような今社会で問われている問題と直接結びつくことだと思います。実際に企業を対象にリーダーシップ研修を行ったり、自身の研究の観点から提言したりといったことを行っています。

—研究者のどのような点に意義を感じられていますか。

特に心理学を扱った研究をしているので、目には見えない人の心や人と人との関係性を取り出して、その法則性の一端に触れたときにはとてもやりがいを感じますね。他には、社会に対して提言できる機会があるというところにもやりがいを感じます。責任は重大ですけどね。あとは、研究職は好きなことを仕事にできて比較的裁量度が高く、研究を進めるペースは結構自由なのでそういう部分は魅力的かなと思います。

—素朴な疑問なのですが、大学の先生はどのようなことをされているのかと…

実をいうと、社会で持たれているイメージよりもずっと忙しいんですよ（笑）。平日の昼間は授業、会議、学会の仕事、学生指導など結構時間はつぶれていて…。自分の研究にかかわることをするのは平日の夜や休日だったりします。本や論文の執筆時期は締め切りに追われることもあります。先ほどの裁量度が自由という話とは逆になってしまうかもしれないのですが（笑）。

—学生がレポートの締め切りに追われているのと似ていて少し親近感が湧きます（笑）。

その中でも日々の疑問を大切にされて研究につなげていらっしゃるのすごいです。

そうですね、心理学は日々の生活の中で疑問や問題意識を持つことができる学問分野なので、その点でいうとほかの学問とは違うのかなとも思いますね。

また、社会や組織といった大きな枠組みの中で受ける影響や、そこに一個人が影響を及ぼすことはできるのかといった社会的な動物としての人間にとっても関心があったので、心理学の中でも社会心理学がフィットしたという感じですね。集団の中で起こる人間行動はすごく複雑に見えるのですが、複雑だからこそそれを整理して行動を決定づけている要因を見つけ出すこと

にチャレンジのしがいがあると感じていて。でも根本には人間関係がうまくいかなかったときの苛立たしさを解明したいという気持ちにつながっていますね。あとは、社会心理学はある研究テーマのための実験方法を一からオリジナルで考えるのですが、それがすごくおもしろいなと院生の時感じていました。社会で起きていることが実験室で再現される場面に遭遇すると、やっぱり面白いなと感じますね。また、社会心理学者は方法論にこだわっている人というのは少なく、その時々で最適な研究方法を用いてやっていて、実験の企画を自分ですることが社会心理学の特徴でもあり面白いところだと感じます。

—最後に、大学生に向けてメッセージをお願いします。この質問が一番難しいのですが…（笑）。積極的に自分で動いて興味を持てるものに出会ってほしいという思いがありますね。学問に限らずこれだったら時間をかけてもいいなと思えるものを見つけるには、自分で本を読んだりいろいろな人の話を聞いたり様々な体験をしたり、そういうことが絶対必要だと思うんですよ。そして見つけた自分のやりたいことを自分で伸ばしてほしいですね。高校までと違う自由と自己責任が表裏一体となった大学で、環境をうまく使って自分を伸ばして行ってほしいなと思います。



坂田先生、ありがとうございました！

“Look at reality with your own eyes”



Prof. Mari Katayanagi

Graduate School of Humanities and Social Sciences

IGS Field of Peace and Communication

What made you choose to learn about international war at the beginning of your academic career?

It is not really that I tried to study international armed conflicts. I chose to study international human rights law. Conflict situations are the most serious contexts in which human rights can be violated, and the study led me to related activities. I previously worked for an international peacekeeping operation before transitioning to peacebuilding. In that way, my focus shifted from development to conflict and peace.

You grew up in Japan, and what moments motivated you to study human rights issues in post-war society? (The interviewer presumed that Japan was the reason)

I grew up in Japan but spent 3 years of my childhood in Egypt. It was an eye-opening experience. I noticed children working in the winter wearing very thin clothes and walking barefoot. That was when I became interested in development. Since then, I have been interested in working for the United Nations. That was kind of my dream. However, while studying at university, I realized that this dream was a little out of reach. So, I did not really pursue this path. I earned my first master's degree in area studies from a Japanese university. In my study, I focused on French colonial policy in West Africa. It is quite different from what I am doing right now. Following my master's degree, I began working for an international law firm. Although my work at this law firm was interesting, it was not something I wanted to do for my life. After more than 5 years of work, I changed my career path and revisited my dream of working for the United Nations. On one occasion, I was told that if I studied or worked abroad, I might be able to work for the United Nations. That was a kind of requirement. I decided to study abroad and earn a second master's degree. At the time, I needed to choose a research topic. When I was looking for something to learn, I came across international human rights law. I chose a course in England and studied international human rights law, leading to a peacekeeping career.

Can you talk a little bit about what drove you to go to a doctoral course and stop working for the United Nations?

During my second master's course, I was advised to pursue an internship. I wanted to work for a UN agency, but finding a position was difficult. When looking for an internship, I was told that it would be better if I worked as a UN volunteer, which means it is not an internship because internships can be tricky.

Assuming it is an internship, depending on where and with whom you work, you may only be asked to do photocopying or make coffee, among other tasks. So, the advice was to work as a UN volunteer.

I have accepted the advice. I registered with UN Volunteers and waited for the call. When I was advised, I was told that because you speak French, you will find a job in Rwanda very soon. It was after the genocide in Rwanda. I expected to travel to Rwanda in a few months, but I was still waiting for something to arrive in about a year. During this waiting period, I was thinking, “I don’t know when I’ll get a call from the UN Volunteers office, then I can pursue PhD studies.” When I finished my master’s program and dissertation, I really enjoyed the research. I applied again for the Ph.D. program in England. Around the same time I was offered enrollment, I received an offer to work for a UN peacekeeping operation. I thought, okay, I want to do a Ph.D., but first, I can do UN peacekeeping work. I decided to wait and pursue peacekeeping because I could postpone my Ph.D. enrollment for a year.

What do you think about the perception of the people of their country in a post-war state?

It depends on the type of conflict. Consider the current conflict between Russia and Ukraine. In that case, the conflict has significantly increased the Ukrainian people’s affection for their home country, right? Because they are extremely proud of their country. They also believe that another powerful state is harming their country. So, their emotion and willingness to protect the country are particularly strong right now. When it comes to conflict within a country—and the majority of the conflict we see today is non-state, or internal armed conflict—it is extremely complex because people are fighting against fellow citizens. People may have strong feelings about their own ethnic group but not about the country. So, their feeling of affiliation may vary depending on the state and ethnic group. However, in some countries, these feelings about their own ethnic

group are referred to as nationalism. It all depends on how the term is used in the specific context.

Given the variety of global cultures, how do you think we should balance the relationship between the sovereignty of a single country and international security?

Internal security? Yes. You know that we must respect sovereignty under current international law or international law principles. So that is the basic, foundational element of international security. Respect for sovereignty and international security rarely contradict each other, but there can be a complex context. The most straightforward example is China’s relationship with Taiwan. Where do you see sovereignty? Of course, Taiwan is part of China. Some Taiwanese define sovereignty as Taiwanese independence or an independent Taiwanese system. So, there is the question of where to draw the line of sovereignty. In other contexts, the issue of self-determination arises. Have you heard about the Basque people in Spain? Okay. So, the explanation is straightforward. The Basque people seek self-determination, which means they want their own country. Nonetheless, Spain as a state refuses to recognize this self-determination. Because it is part of Spain’s sovereignty and affects the country’s territorial integrity. It comes down to deciding whose claim to believe and where you think you can draw the line.

What do you think about Russia and Ukraine’s case of sovereignty?

When we talk about sovereignty, because each state has a recognized border, Russia is obligated to respect Ukrainian sovereignty. However, the issue is the memory of some Russians, represented by Putin. The two countries are inextricably linked by history. It is also a security issue, as Ukraine’s proximity to Western Europe poses a threat to Russia’s security. I believe Western Europe and

Western countries should have been more cautious in approaching this issue. This is a problem of the powerful; when there are two entities, one stronger than the other, the stronger one is typically less attentive. Is the powerful one paying enough attention to how the weaker one feels? This is similar to a minority issue in a country. Minority groups are always perceived as threatening, dominated, or denied their right to self-determination. Meanwhile, the stronger side does not understand this fear. Quite often, this is the source of conflict because the weaker side perceives a security or existential threat. When the threat becomes unbearable, they take up arms. As a result, in the Russian–Ukraine context, we may believe that Russia is a powerful country. Yes, it is a powerful country, but when NATO stands united against Russia, it poses a considerable threat. Furthermore, if there is a threat close to the border, such as Ukraine, Russia is concerned. Russia was very clear on this point, but Western countries paid little attention to it.

About Peacekeeping,

Some of my classmates are wondering who will take peacekeeping as their major in the future. They are worried about how their future studies are being played and well purchased. Like how they can complete their studies in real life and find a job. Do you have any suggestions for them?

So, assuming that some students want to work in peacekeeping operations or study this topic, what if they want to do something else in the future? Both are possible. Many students have studied peacekeeping topics and then worked for a private company that has nothing to do with what they learned. At least in Japan, it is quite common. Many people study something and work on various projects. However, suppose you want to work in peacekeeping. In that case, you can work on it with the knowledge you have gained, as there are numerous ways to get involved in peacekeeping. For example, you could be a political officer, a gender advisor, or a human rights advisor. Peacekeeping operations require a variety of jobs in the accounting, personnel, and logistics sections. The options

are open. Your country's policies may also influence it; for example, China is becoming increasingly involved in peacekeeping. In this case, you may be able to participate in more peacekeeping operations. In some countries, opportunities may be limited. Still, we can apply directly to the UN. The doors are open.

Message for Students inviting them to peacekeeping

It is a valuable experience to see what armed conflict is and how it affects people, men, women, and children; everyone is affected by conflict because understanding the situation is quite rare. From a work perspective, if you work for the United Nations, you can accomplish more than you could as an individual because people expect you to be a part of the UN. Furthermore, once you are involved in peacekeeping, you see the impact your work can have. However, if you work for a large corporation, you are only one component of the company's production. For this reasons, you may not be able to see the direct impact of your work on anyone or anywhere. Still, in peacekeeping, you can see the dynamism and impact you are having. You may be addicted to this dynamic. Yes, this is extremely exciting work.



在学生インタビュー



志方 一稀 さん

総合科学部 総合科学科 (IAS)
令和4年度 入学

—なぜ広大の総科に入ろうと思われたのですか？

受験するときに2つのパターンがあると思っていて、1つが大学を決めてから学部を選ぶパターンでもう1つが学部を選んでからというパターン。僕自身は後者で、総合科学部があるところを探したときに広大に行きついたらって感じです。

—総科で学びたいと思われたきっかけは何ですか。

僕は高校の数学教員になろうと思っていて、理学部や教育学部で数学を学ぶのはなんか違うなと思ったんですよ。というのも、数学のために数学を教えるのではなくて、数学って経済とか物理とかいろんな分野に応用できるから教えるのだと思っていて。だからその応用先を見据えられるような教え方がしたいなと思って、総合科学部を志望しました。

—総科に集まる人から何か刺激を受けた経験は。

毎日ありますね。数学で表現すると、最初は比例・反比例のグラフが第1象限にとどまっていたのに、勉強していくとマイナスの世界がでてくる。そうなると第4象限まであるわけだから実質世界が4倍になった。総科に来るとほんとそういう感じで、今まで見てきた世界の裏の裏まであるんだって思いましたね。挙げだしたらきりがありませんけど、自分で楽曲を制作して配信している人とか、動画編集がめっちゃうまい人とか、あとは政治参画にすごく意欲的な人とか…大学ってこういうところなんだって思いました。

—いろんなバックグラウンドを持った人と出会ったり関わったりするための秘訣はありますか。

秘訣ですか…(笑)。「いざない」の授業の時に毎回スーツで行ったんですよ。そうするとスーツの人で覚えてもらえて、「なんでスーツ着てるのか？」っていう話から入ることができたんで、そういう自分の身を挺した話題作りっていうのはしていましたね。

—授業内で質問を活発にされていたとかはありますか。

それもありますね。やっぱり常に疑問を抱きながら授業を受けるようにしているので、そういう疑問を発信したいなとは思っていますね。

—総科に入ってよかったと思うことはありますか。

自分が知ろうと思わなかったことを知ることができたことですかね。もともと物理や数学に関心があったのですが、いろいろな人と関わっていく中で知りたいことが増えていった感じです。総科にきて自分が変わりました。(自分自身)高校時代シビアなところがあって、興味のないことは自分にとって必要ないって感じだったんですけど、やっぱりそういうところこそ総科にきて変わったところですかね。

—総科生が1年生の時にみんな受ける「総合科学へのいざない」の講義も影響していたりするんですか。

いざないは5コマ目にあるので正直しんどいなと思ってはいたんですけど、そういう風にある程度強制された空間でインプットの作業をしていると、それまでの先入観から解放された感覚を味わえました。

—総科を選ぶ際、既に大学で学びたいことが決まっていたか。あと、周りの様子はどうでしたか。

僕は決まっていたんですけど、周りは半々だったと思います。国立大学で総合科学系の学部があるところは珍しくて、広大総科の場合、健康スポーツ系や言語コミュニケーション系はほかの大学では一つ学部ができるくらいの規模の学問も総科で学べるということで入ってきたという話はよく聞きます。

—広大の受験はどうでしたか。これをしてよかったという対策などありますか。

前期の理系入試で受験し、二次では数学と物理と化学

を選択して合格しました。というのも、実は僕、私立は
一校も受けずに光り輝き入試と前期、後期をすべて広大
の総科で出願したんですよ。大学＝総科みたいに思っ
ていた部分もあったので絶対受かりたいっていう強い気
持ちはあったかなと思います。やってよかった勉強法に
ついては、計算力をあげることですかね。計算が素早く
出来ればその分演習に割く時間が増えるので、時間がな
い受験生の時は計算力を上げることで勉強効率を上げ
られたかなと思います。

—数学の教師を目指されているというお話でしたが、総
科のカリキュラムに追加して教職を取るのに必要な単位
を取っていくのは大変だと聞きます。実際どうですか。

大変です(笑)。でも、数学教師になるためにここへ来
たので、あんまり忙しいばかり言いたくないなとも思
います。忙しい理由としては、数学という科目の性質上、
(数学が)どういう風に利用されていくかを見据えてい
かないといけないのがありますし、そもそも教職という
仕事が生徒の成長に携わるといふ点において、多面的で
業務内容が多岐にわたる、つまり総合科学的であること
が挙げられると思っていて、とにかく多くの時間を割く
必要があると考えています。やはり学校の先生は授業で
勉強を教えるものと思われがちですが、それは教員の職
務のほんの一部に過ぎないですよ。だから、総合科
学の多角的な思考と教員は相性がいいと思っていて、総
科で教職をとるといふのは自分の中で最良の選択だっ
たと思います。

—1年生の時にしておくべきことや意識して動いたこと
などありますか。

昔からの自分の習慣なんですけど、一個か二個先を見
据えて今を過ごすっていうのをやっていて。2歳上の姉
がいるんですけど、姉がしている勉強とかに興味があっ
てよく先取りして勉強していました。そのときに「今し
ている勉強を応用した先にはこんなことがあるんだ」と
思ってより勉強内容を深めることができ、先取りの重要
性をひしひしと感じていました。だから、1年生のうち
は2年生になったらどんなことがしたいか、そのために
は何が必要かというのを逆算的に考えながら過ごすこ
とが、大学生活を充実させる秘訣なのかも。まあ、とは
いっても好きなことをするのが一番だと思います！

—1年生の時と比べて2年生の授業リズムや授業の感じ
は変わりましたか。

2年生以降、総科では他学部で取った単位も卒業単位
に含まれたりするので、そこで自分の関心のある分野で
もっと知識を深めたいとき他学部の専門的な授業を受
けることで、より自身の知見を広げることができます。
もちろん総科の授業は2年生以降に専門性が増すとい
うこともあって、学び・授業の深みは1年生の時より増
しますね。

—課外活動は、部活やサークル、ボランティアなどはど
のくらいの頻度で活動していますか？

課外活動に関しては周期的には動いてないです。現在
主力で活動している所属サークルは、軽音系のロック同
好会とランニングサークルのランナーズの二つなので
すが、ランナーズに関しては曜日が決まっている一方で、
ロック同好会は皆の予定が合う時に練習する、みたいな
感じですよ。ライブなどのデッドラインは決まっているの
で、それまでにどのように練習していこうかっていうの
があるんですけど、次のライブまでに完成しなそうだ
ったので、昨日は夜の12時から1時まで練習しました
(笑)。皆バイトとかで忙しかったので、そこしか入れ
られなかったんですけど、そんな風にギリギリでやって
いる感じですかね。変則的な時間とかも、中学・高校と
違うと思うんですけど楽しいですよ。今が一番充実して
ます。





—大学4年間で叶えたいことなどはありますか？話せる範囲で結構ですが。

自分の将来の目標は、高校の教員であると先ほど話した通りなんですけど、それってどちらかという自分の中では結構具体的な目標で。もっと抽象的な目標っていうのは、指導者になることなんですよね。それは自分ってすごい人間だと思っているからなんです。それは何も自分そのものがすごいんじゃないくて、今周りにいる人、地元で自分に期待を寄せてくれている人とか、希望を託してくれている人とか、すべての人たちの想いがあるって、今の自分が成り立っていると思っていて、そういう人たちに何かを還元したいと常日頃思っています。そのために自分は何ができるか・何をすべきかという、やはり指導者のような人を導く立場で、周りの人が各々の志す方へ向かっていけるように支えることだと思っています。そんな人になるためには、総科でいろいろな人の立場を知って思慮深く考える経験を積むことが必要であると考えていて、そのようにして偉大な指導者になることが人生における目標であり、そうなるための素養を身に着けることが大学在学中の4年間の目標でもあります。

—広島大学の好きな点など教えてください。

こちらへ引っ越して来るときに、両親もこちらへ来たんですけど、父親は地元神戸の大学に進学していて、ほとんど神戸を離れていなかったのが割とシティボーイなんですけど、こちらに来た時に田舎だとは言わなかったんですよね。ただ広島大学は大きいなっていう風には言っていました。「廣大」って書くぐらいですからね。でも「こんなに大きくても意味ないんじゃないか」みた

いなことを僕がポロっと言ったら、怒られたんですね。「小さい水槽には大きな金魚は育たない」といって、「大きい人を育てるためには、大きい敷地が必要」ということを続けて言われて、なるほどと思った記憶があります。とにかく広いことが、のびのびと学生生活を送るためには良いことであると思います。

—アルバイトはされていますか？

アルバイトは、生協のPCSSというパソコン教室ですね。パソコン初心者向けに、大学生活でどういう風に活用して行くかというようなセミナーです。あと、プログラミングスクールで小学生向けのプログラミングを教えるアルバイトをしています。

—1人暮らしの生活面はどうですか？

自炊が全くできないんですよ。平日は学食があるんですけど、土日は(自炊せずに)空腹に耐える時間があります。食事を作る時間があったら、いろいろなことをしたいという思いもあります。本当に秘書を雇いたいくらいです。

—おすすめの授業、印象的な授業はありますか？

僕は割とオムニバスの授業をおすすめしています。いろいろな先生と関わることが大事だと思うので。自分としては、授業ではなくても調べたらなんとかなるなって思っていることが結構あるので、ただ調べても分からないことってあるじゃないですか。それって何かあったら、数式の理解や、この数式ってどういう意味かな、みたいなことはやはり教わらないとできないと思うので、だから数学を勉強しているところがあるんですよ。

数学は、総合科学というか、いろいろなことを勉強するための糸口や言語だと思っているんです。だから、授業というよりは自分の基礎力を強化して行きつつ、自習力を高めるといふところを意識しています。

—領域の選択では自然科学だと思のですが、そこは一択だったんですか？

意外と紆余曲折しているところもありまして、数学の教員になるというのは決まっていたんですけど、結構領域選択はなびいていたと思います。大阪大学の人間科学部ってご存じですかね。そこも結構学際的な学びがありまして。(僕が)高校のとき総合的な探究の時間で「笑い」について探究を行ったんですよ。それをきっかけに「笑い」って面白いなと思って、そこから人間って面白いなという風に思ったことがありました。その時から数学は好きだったんですけど、「笑い」についても勉強できたら良いなと思っていて、それが自分自身の中で、総合科学的な、学際的な学部に行きたいなって思ったきっかけになったのかもしれない。探究の授業の際に引用した文献が大阪大学の方のものだったので、人間科学部はいいなということで、進学を試みたんですけど、(心理学系の研究に関して)少し人間を実験台にしている感があり、なんか違うなと考えて、広島大学総合科学部に来たんです。そういうこともありまして、最初は人間科学を志望していたところはあったのかもしれないです。ただ、勉強していくにつれて自分の生きる道は数学だなということに気づいて、その時はまだ総合科学部にしようかな、くらいの感じではあったんですけど、やはり数学教育にあたって、そういうことを考えないといけないなと思った時に、ここしかないなということで数学を専攻しようって思った瞬間でしたね。

—総代の仕事について教えてください。なぜなろうと思われたのですか？

この仕事をするようになったのは他薦です。自分からなるというよりは、この人になってほしいっていう風な思いがあるからやるべきだと思っていたので、その中で他薦していただいたってところで成り立っている感じです。やはり人脈の仕事なので、そういう点ではスーツの人って呼ばれていたこともあってパイプはあったのかなと思います。もう1つ、大義名分的なところなんですけど、総合科学部はいろいろな価値観の人が集ま

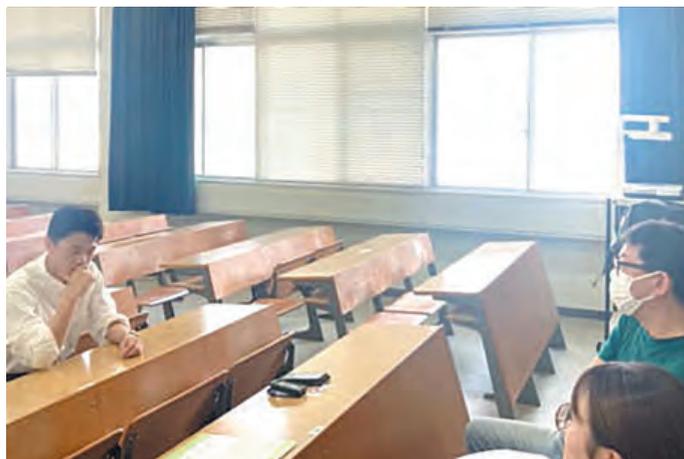
っているところがあるので、それ故学生は自分と違う考えの人と自然と離れて行ってしまいうんですよね。人は同じ価値観の人と集まりたがる生き物なので、さらにコロナによって人と人とが離れ離れになってたら仕方ないんですけど、その中でどういう風に自分と違う考えの人と向き合っていく環境をつくるかっていうと、学部規模の大きなイベントを通じてだと思うんですよ。そういう風に考えると、コロナで規制があったところから緩和されているところなんで、今が変わるチャンスかなって思うと、僕らの代で責任を感じて総代になろうって思った次第です。

—総代をやっていて楽しいですか？

大変ですよ。一方的な想いもしれないんですけど、みんなの居場所が作れるんだなっていう誇らしさがあります。僕らが目標にしていたところは、コロナ前の活気ある先輩方の代だったんですけど、本当に帰属意識が強くて、総合科学部が大好きだって言えるような環境だったんですよ。ただ、私たちの代になると、イベントがあまりなく関係が希薄で、だからこそそれぞれの学生にとっての「居場所としての総合科学部」を作り上げていきたいなって思っていたんです。そんな中で、「J」という総科の部屋を作ってみたり、あとはイベントを通じて仲良くなってもらったり、そういうことを通じて、自分には帰る場所があるという風に思ってもらえたら良いなと思っています。居場所を作った時に、皆さんの充実した顔が見えるのが嬉しく、楽しいなと思う瞬間ですね。

—大学で、自分の帰属場所とかがあってあんまり考えたことがなかったですが、やはり必要なんですか。

広島大学の学生はほとんどが1人暮らしをしているので、そう思うと本当に心細い部分はあると思うんです。



無くても良いという意見はあると思うんですけど、帰る場所があるから挑戦できるというのはあると思うんです。保険ではないですけど、最終的に、ここに帰ってくればいい、だからこそ挑戦できるというような環境を整えるという点では、すごく大事なのかなと思います。

—コロナ禍の総代の仕事とはだいぶ変わって来たのではないかと思うんですけど、そういう意味で意識していることとか、大変さとかありますか？

コロナ前は、繋いでいくことが総代の仕事であったんですよ。先代を引き継いでいっていたのがプツンと無くなってしまって、コロナ禍の総代は、とにかく逆張りというか、コロナ禍だからイベントを中止するのではなくて、コロナ禍でもできるイベントを徹底的に計画してくれた方だったんです。一方で、コロナが開け切ってないような感じで、企画してもボツになったことも多かったようです。

それで、我々の代になったので、どちらかと言うとオリジンを作る、原点を作るといった気持ちでやりました。もちろん、先代が作ってくれた部分があるんですけど、その精神を受け継ぎつつ、システムをゼロから作り直して気持ちでやりました。原点を作るところは意識しましたし、今も作っていているところです。

—受験生の読者へメッセージをお願いします。

それは難しいですね。いざ大学生になったら大学生の気持ちしか分からなくなってきてはいるんですけど、(受験生に伝えたいことは)高校の学びと大学の学びは一緒にはできないということですね。結構、進路選びで

ミスしている人が多いんですよ。弁護士になりたいのに理学部に行った人とか居るんですけど、数学好きだから数学科に行きました、みたいなことは意外とミスなんです。大学の数学の分野では論理的に追求するところがあったりして。そして高校の理系科目は、大学ではどうなるのか。「地学は生物になる、生物は化学になる、そして化学は物理になって、物理が数学になる」という言葉がありまして、だから物理でやってることって高校の数学の延長だったりするんですよ。それで数学は何があるのかっていうと数学は哲学なんですよ。だから本当に自分の好きだった科目、授業あるいは研究分野というのがゴロっと変わる可能性があるんで、そこが結構怖いところだと思います。だからこそ(進学後専門を決められる)総科に来てほしいという感じなんです。大学で必要なことって教養を深めることだと思うので。正直、少し専門性に欠けるところはあると思いますが、他の学部や自学自習で補える部分はあると思うので。先ほど言ったとおり自分が興味を持たなかったところを打破して行けるようなところが総合科学部だと思います。高校で培った知識だけでは先々のことまでしっかりと分かっているはずもないと思うので、そういう時のための選択肢として、総合科学部はあると思います。勉強頑張ってください。

志方さん、ありがとうございました！





平島遥さん

総合科学部 総合科学科 (IAS)
令和5年度 入学

—なぜ広大の総科を選んだのですか。

私はまちづくりや都市計画に興味があったんですけど、その場合は経済や砂防学、環境に関係することも学ばないといけなかったんで、分野関係なくいろんな授業を受けられるのがいいと思って総合科学部にしました。

—そんな総科に集まる人と接する中でどんなことを感じますか。何か刺激を受けるようなことはありますか。

みんな興味を持っている分野が違うので、聞いていて面白いのと、あと知的好奇心が旺盛な人が多くていろんな活動に参加している人が多いから、自分も参加してみようかなという気持ちになれるのが総科のいいところだと思います。

—来年からは将来の進路設計などに合わせて領域選択をしていくと思うのですが、何か今のうちに意識していることはありますか。

やっぱり、まちづくりの事をしようと思ったら社会探究領域か自然探究領域に進む道の2つがあると思うんですけど、まちづくりに関することが学べる授業があるほうの領域に進みたいです。

—ちなみに、まちづくりでいうと将来この地域にかかわりたいなどありますか。地元に戻ってとか…。

それもあります。地元がとにかく海に近くて高齢者も多い地域なので、地震や津波がくると結構危なくて。子供の数も減ってきてまちの元気がなくなっている

ので、それをどうにかしたい気持ちがあります。

—まだ入学して2か月くらいしか経っていないと思うんですけど、とってみてよかった授業などありますか。授業のヒット感はどうですか。

自分が今まで中学校や高校の時に面白いなと思って読んでいた本の学問分野がどれかは分かっていたんですけど、人文地理学を受けてみたらまさにこの学問だったんだと感じました。大学の先生の話は研究の最先端なので、正しい知識が身につけている感覚があって自分の興味とマッチしているなど感じていました。

—部活やサークル、ボランティアなど、なにか課外活動に所属されているようでしたら、どのようなことをしているか教えていただけますか。

私は文系入試で総科に入ったんですけど、生物にも興味があって、サークルは地学研究と天文研究の2つに入っています。周りがほぼ理系なので、みんな自分が今まで学んでこなかった鉱物や星の名前をよく知っていて教えてくれるので、楽しくやっています。

—なかなか高校では無いようなサークルだと思うんですけど、やっぱりそこに集まる人と関わる中で得られる刺激などはあったりしますか。

中学・高校で無かった分、自分で石を集めたり星の観測を続けていたりした人が多いので思い入れが強いんですよ。だから、その分大学に入ってきて自分の好きなことに集中できている感じがして熱意がすごいんです。

—今後他に参加してみたい課外活動などはありますか。

リノベーションをしているサークルがあって、空き家を買って新しく立て直す活動をしているんですけど、今のところはスケジュールが合わなくて参加できないけどいつか参加してみたいなと思っています。

—次に、大学生活についてお聞きします。広大のここが好きというポイントがありますか。

森があるところですかね。東広島っていい感じに自然と共生している環境だなんて思うんですけど、その中でも大学はキャンパス内に森があるので、ちょっと疲れたときとかに散策とかしてリラックスできるので、そこは都会にある大学と違っていいところかなと思います。

—大学4年間でなにかやってみたいことはありますか。

留学したいです！イギリスに留学したくて、というのも、イギリスは日本と同じ島国で日本よりも先に都市計画が発達してきた国なので、現地で実際に町がどういう運営をしているか、そして単純に語学留学として生の英語に触れて英語が喋れるようになりたいなと思っています。

—大学の食堂は利用されますか。

1週間に1回くらい。私は午後のオンライン授業を家で受けることが多いので、ご飯も家でよく食べているんですけど、午後も対面授業がある日は友達と学食に行くって感じです。

—オンライン授業の頻度や受け心地はどうか。

コロナ禍で高校生活を送っていた世代なので、このままオンラインが主流になるのかなと思っていたのもあって、むしろ対面が多いなと感じます。高校の時に想像していた大学生活よりも楽しいです！

—高校までの学びと大学での学びはやっぱり違うなとか、自分が意識していることなどありますか。

高校までは国が決めたカリキュラムに沿った勉強だったんですけど、特に総科の場合は自分がとりたいた授業を自由に取れるので、自分が趣味で学んできたことや科目になくて学べなかったこともできる分、自分が何をしたいかをしっかり考えていかないと大学での勉強は味気ないものになるかなと思います。

—ここからは、生活面の事を聞いていきたいと思います。ひとり暮らしをされていますか。もしされていれば、大変な面などありますか？

広島県外から来たのでひとり暮らしです。今まですべての家事を自分一人で負担することはなかったし、それをしながら高校の時以上にサークルやバイトなどいろいろなことをするのはあまり時間的に余裕がないので、計画的に家事はするようにしています。

—大学の友達はどうのようにつくられましたか。

4月の最初の頃に話しかけた子たちと話すことが多いですけど、それ以外でもサークルで出会ったり、たまたまその時いた子だったりとか、授業で隣の席に座った子

に話しかけて一緒に学食に食べに行ったりとか…。趣味が合うと分かった時には一緒に映画を観に行ったり、ご飯を食べに行ったりするようにしています。



←地学サークルの活動の一環で博物館を訪れた平島さん。

—大学での初めてのテストはいかがでしたか。

先生によってテストの出題傾向とかがガラッと異なるので、全くわからない状態で、対策不足だったかなと思う点が幾つかありました。テストだけではなくレポートもたくさんあり、抱えてしまったところなどは高校との違いを感じました。高校のテストだと、点数が高いことが重要視されがちだったと思うんですけど、大学だと自分がその授業を受けてどう考えたとか、自分の考えが結構大切で、そういうレポートを提出することで見られて評価されるので、そこはやはり高校のテストと違うなと思いました。

—思い描いていた大学生活を送れていますか。

暇ではないなと思います。大学生活はよく暇になるとか、1番遊ぶ時間があるとか言われるんですけど、全然暇じゃないです。そこは楽しいことでいっぱいなので、良い暇のなさというか、充実してはいるんですけど、やはり思っていたよりも忙しいです。

—1週間のスケジュールを教えてください。

水曜日が丸々1日授業がなくて(全休)、水曜日と土日にアルバイトを、他の平日は逆に家に帰って課題をというようにスケジュールを組んでいます。アルバイトはショッピングモールのサービスカウンターで、5月頃に始めました。

—ホームシックはありましたか。

福岡出身で最初の方は福岡にどうしても帰りたくなって、1か月後ぐらいに一旦帰省したんですけど、その生活を4年間続けるわけにもいかないなって思ったので、週3回ぐらいは親に電話するようにして、その分広島での生活に慣れていくように心がけています。

—大学生になって、時間の使い方や遊び方に変化はありますか。

今まではスマホを見たり、映画を見たり…他は何もしない、ただそれだけをするっていう時間帯が多かったんですけど、大学に入ると、サークル活動に行ったりだとか、友達とちょっと広島市や別の市に行ってみるとかする機会が増えたので、同じ自由時間の使い方でも結構アクティブになったと思います。

—大学卒業後の進路などもう決まっていますか。

国家公務員にずっとなりたくて、例えば国土交通省とかだったり、環境省とか、農林水産省とかだったり、やはり環境に関係する仕事、もしくは都市計画に関わる、そういう公務員として働きたくて、それは前々からの夢でした。いずれ東京とかに行くイメージも持っています。

—以前平島さんとお話していて、リサーチ力のすごさを印象的に感じていました。普段から意識していることや、それこそ夏季のインターンシップなど、そういった計画はありますか？

夏は県庁のインターンシップに申し込んだんですけど、そこを足がかりにして、2年生あたりで留学したいという思いが強く、それを考えると、やはり1年生の間から就職のことや自分の興味のある分野に飛び込んでおかないといけないと思っているので、そこは意識して動くようにしています。

—今日この後のスケジュールを教えてください。

今日は2コマから5コマまで全部授業です。大学の授業は、必修の授業があるじゃないですか。正直なところ面倒くさいな、とか思うものの中にはあるんですけど、とりあえず出ようという精神です。辛くてもとりあえず授業に参加しておくということが、最初のモチベーションとしては必要だなと思っています。意外とその授業が面白かったり、ここは将来関わってきそうだなって思っ

たり、意外と思いがけない方向から来たりするので、必要ないと思うような授業でも、とりあえず出ておくということは大事だと思います。



↑仲のいい友達とランチ中の平島さん。総合科学部以外の友達とも交流があるそう。

—受験のことについてお聞きします。総合科学部の受験対策はどのようにされましたか。

私は文系入試だったので、一次試験はみんなと同じで国立大学の共通テストを受けたんですけど、二次試験は英語と小論文がありました。小論文は結構普通の大学の入試科目にはないと思うんですけど、高校の先生に相談に行って、過去の問題など10年分はするって決めて、10年分コピーしたのを片っ端からやってみて、終わった分は先生に提出して見てもらって、ここがダメだったとか自分の考えをもうちょっと書いた方が良いとか指摘をもらって、さらに改良してもう1回書き直して見てもらいに行くことを行っていました。2回くらい書き直すことで、自分の間違いを訂正してその間違いを2度としないことにも繋がるので、そのルーティーンをずっと受験本番になるまでは繰り返していました。

—最後に受験生へのメッセージをお願いします！

総合科学部は自分の取りたい授業を取らせてもらえりし、先生たちもそれに対して寛容というか、むしろ積極的にいろいろな分野の授業を取って、自分のやりたい、行きたい進路を見つけてほしいっていう感じなので、自分の将来に対して、恥ずかしがったり、こういう夢を持っていて良いのかなって思ったりすることがないです。自分のしたいことができるという意味では、本当に総合科学部が一番良い学部、大学だと思っています。ぜひ総合科学部に来てください！

平島さん、ありがとうございました！

“Welcome to IGS !”



Taiyo Morisako

Undergraduate student

Department of Integrated Global Studies (IGS)

Self-Introduction

I'm Taiyo Morisako. I am in my second year of IGS. I live in Saijo with my family. I am a native, so I grew up in this town. I enjoy listening to jazz and other types of music. My favorite trend is Eurobeat. I like to listen to music, but I am not particularly good at playing it. I also like singing when I'm alone because singing in front of others is embarrassing. I always sing while I cook.

Why did you decide to study at IGS?

To be honest, I was not particularly interested in any of the subjects in IGS. I initially had no interest in IGS's three

areas of focus: peace and communication, culture and tourism, and environment and society. However, my only motivation to come here was to make friends with international students and learn to speak English fluently. Another point to consider is that my house is conveniently located near Hiroshima University and is reasonably priced. I wanted to improve my English.

New students might be curious about how to choose their own study field. How did you choose your field after entering IGS?

Students are supposed to choose their fields at the start of the second year, so I have already decided on my field. I chose the field of peace and communication because I am passionate about gender issues and politics. Instead of communication, I plan to focus on politics or peacebuilding. My tutor is an anthropologist, and anthropology is always focused on gender issues, so I have another option: culture and tourism, so I was wondering what fields to pursue. However, I was more interested in politics or the system concerning gender issues, feminism, or women's issues, so I chose that option. Various other factors influenced my decision to pursue this field. One of them is a professor of peace and communication, and I am interested in taking her class. Her name is Professor Katayanagi, and I interviewed her during the first year of the Invitation to IGS course. I became very interested in her research. That is another reason why I prefer peace and communication.

Do you have any favorite IGS classes?

I am considering taking an anthropology course because I am interested in gender issues. I'm taking two anthropology classes, and it is interesting to note that the two professors, Professor Nishi and Professor Seki, have opposing viewpoints on similar issues. So, it is interesting to compare their opinions. One professor informed me that there is no correct answer in any field of study, including anthropology. So, I can dig deeper and learn more.

What is your favorite aspect of IGS?

I believe that IGS's unique selling point is the closeness of its students. Because we only have 40 students, we communicate and collaborate extensively for assignments, and we hang out frequently to stay close to one another. Another thing is that one-third of IGS students are international students with backgrounds that differ from those of the typical Japanese who over-respect senpai. However, at IGS, we are internationalized and frank with one another, including the senpai. So, I also appreciate that point.



Do you have any advice for students who have difficulty communicating in other languages?

I had a similar experience at the start of my first year. Just communicate with your friends without regard for your language. The communication I am referring to is verbal communication, gestures, or something similar. We can gradually learn other languages. Avoid isolating yourself, make friends, and do not hesitate to ask questions, even in the classroom or during daily conversations with friends. Nobody seems to care about your fluency in any language.

What is the charm of Saijo?

That is a good question because I am local. For those older than 20, I recommend trying Japanese Sake because Saijo is famous for its sake. We have nine sake factories in Saijo, and they have different tastes. So, it is delightful to compare and test the taste. For first-year or high-school students, I recommend the scenery of Saijo. I love Saijo's scenery because we can feel the four seasons in the countryside. In spring, we can enjoy cherry blossoms, in summer, we can feel the energy of green and trees on the mountains, and then in autumn, the mountains turn red. In winter, the outside is severe, but at the same time, it is stunning, especially in the early morning. In the morning, the sun rises in the town, which is covered with snow, so it sparkles. I love the beautiful scenery in Saijo in winter, even though the weather is severe; the temperature can drop to -8°C in winter. Despite that, I love the beautiful scenery in Saijo.

Do you have any extracurricular activities or clubs that you're in charge of?

I am currently the vice president of the COOP international student committee (as of May 2023) that supports international students. I attend weekly meetings and my main job is translating. Our committee has Japanese and international students who cannot speak Japanese well. The president of the committee is Filipino. He speaks English and Japanese, but mainly in English, so I translate between the president and other members. I was assigned that job because I am an IGS student. The former president and vice president were also IGS students. (As of May 2023) They did not have such problems with languages, but our generation has language difficulties. So the seniors told me that I can be a translator to help them. The main job of the vice president in the committee is like that. The reconciliation between club activity and school study is not so heavy in my case because we have only two weekly meetings in general and teams. It only takes two or three hours a week, so it is not demanding for me. I enjoy both the study and the club (committee) activities.

Which country do you want to study abroad in?

I have decided to go to the Philippines in the summer of 2023. I was open to studying abroad in any country. I just wanted to travel abroad. So I asked the advisor how I could choose the countries, and she advised me to pursue my interests in studying. Then, I suggested that I was interested in gender issues. The Philippines is said to have the highest gender equality in Asia, so I decided to visit and learn how they improve gender equality in the country. Also, the Philippines is an English-speaking country, and I wanted to improve my English even more. My initial options included the United Kingdom, the United States, Canada, and the Philippines, all of which are English-speaking countries. However, due to my low GPA, I could not register for the

UK, US, or Canada. Canada was really interesting, and they have a course on gender issues. However, my advisor and tutor, Professor Seki, recommended an Asian country. In an Asian country, I can learn from a real-life situation that is embedded in society, the community, and people's daily lives. In Western countries, I can only acquire theoretical knowledge, so I decided to go to the Philippines because theoretical concepts can be learned from books, journals, or papers without traveling abroad.

Could you give final wishes to incoming students and high school students who wish to join IGS?

Welcome to the IGS. You can enjoy totally different lives at IGS. You must learn international communication skills. Interacting with people from various backgrounds, with different opinions and ages, is quite interesting. IGS has some older students, so you can interact with students who are older than you, which is different from other departments at Hiroshima University. In other departments, the students are nearly all the same age. In terms of language, I can now speak English, but I could not do so at the start of my university career. I have also studied extensively and worked hard to learn English, but I am still working on it. Don't worry about it; once you enter the IGS and start taking classes and making friends, you can learn English or Japanese.





社会で活躍される総合科学部の先輩に、飛翔委員がインタビュー！

卒業生インタビュー

“変えられるのは自分と未来だけ”



村上 清貴 社長

広島大学総合科学部卒業（6期生）。1983年大学卒業後、リクルートに入社し東京で勤務。親族の先代社長に誘われ93年に村上農園に入社。前職での経験を活かし、O-157によるカイワレ大根の風評被害に苦しんだ会社を再生。2007年、二代目社長に就任。就任時より業績は3.5倍に！！

—ご自身の就職や仕事はどのように決めたのですか？

大学卒業後はリクルートに就職しました。もともと目指していたのは当時人気の金融業界でしたが、話を聞いていると、ここもなんとなくいいかなと思って。内定も早く出たので就職活動を止めちゃったんですよ。リクルートは当時ノルマがきつい会社と言われていましたが、入ってみたら噂よりもきつかったです（笑）。だけど結果的に私にとっては良い会社で、ブラックと噂されている会社にもいろいろあって、学生間の評判はあんまりあてにならないなと思いました。

特に営業での経験はすごい価値のあることだったなと思います。リクルートではたくさん勉強させてもらいました。将来を考えると、就職はキツくても本当に勉強になるところに行くべきだと思います。楽な方に行けば、後々大変になるんですよ。先のことにはなりますが、皆さんは将来80歳まで働くことを前提に、そして自分の中にキャリアとして残るような仕事をして

ほしいです。言われた仕事だけやってたらだめです。自分の頭で考えて世の中を良くする方に、全力でやっていくといいです。楽な仕事で多く給料がもらえれば嬉しいという考え方では生きていけなくなります。日本の未来はあなたたちにかかっていますよ。

—厳しい仕事というのはどういう仕事ですか？また、楽な仕事というのはバイトでも同じなんでしょうか？

厳しい仕事というのは、将来自分の役に立つ、より目標が高い仕事です。普通に考えたらできないよなあ、ってというようなもの。やり方が完成されている誰でもできるような仕事ではなくて、何かを自分で考えて、それで成果を残すというのがキャリアアップです。

リクルートでは、「どうやってやるかはお前が考えろ」と言われた。成果が出なくてもめげずにいろいろと考えてやっていくと、様々な対応力が身につく。最初はプレッシャーを受けた方がいいと思います。好きなことだけして嫌なことはしないと成長できません。バイトでもなんでも、何のためにしているのか、という目的をしっかりと認識した上でやるべきことをやる事が大事だと思います。たとえ、やらなくてもいいと言われても、自分が良くなると思ったことはしてみたほうがいいです。とにかく、一生懸命やるという姿勢が将来に繋がります。

—ここからは、村上社長の学生時代について伺います。まずなぜ総合科学部を選んだのですか？

本当は医学部に行くつもりで、高校時代は勉強しかしていませんでした。進学校で、レベルが高い理数科で、そして進度も早かった。数Ⅲが2年で終わる。3年は入試の過去問だけ。もうついていくのに必死で、赤点をとる夢を卒業しても年に一回くらいは見ていました。その分クラスのレベルは普通科とはまるで違います。約30人のクラスで26人が国立大学に現役で合格

しました。普通科に転科する事もできましたが、当時は医学部を目指していたので、何とか頑張っていました。

でも我々の代は、国立が1校しか受けられなかったんです。それで共通一次(現大学入学共通テスト)が終わった時、この点数じゃ医学部は無理。浪人するとすごくお金がかかる。それで、どこかに面白そうな学部はないかなと思って見ていたら、たまたま広大に理系で受けて文系に変わる総合科学部というのがあって中身も面白そうだと。とりあえず受けたら、受かったので、もういいかなと思って入学しました。3年間毎日勉強してきましたからね。

総合科学部にきて良かったのは、文転できたことです。数学は好きだけど物理と化学は全く興味がなくて、得意なのは、歴史と地理。元々理系では無かった。だから入った理由は割と安易な感じですね。

一でも総合科学部の特色に当てはまったというか、広大総合科学部ならではってことですよ。

総合科学部って当時、大阪府立大学と、広大にしかなかったんです。広大は全国的にも知られているし、総合科学部ではトップだったわけです。トップを獲りたい私には、ありがたいキャッチフレーズでした。

一大学では文転したかったとおっしゃっていたと思うんですけど、具体的にどんなことを勉強したんですか。

勉強してないですよ(笑)。特に遊んでたわけではないんですけど、どちらかという早く社会に出たかったです。普通に授業に参加して、単位を取り、コース選択の希望調査に丸をつければよかったので、社会文化コースを選び、そのなかで一番面白そうだった山下ゼミに入りました。途上国の開発を研究しているゼミで、山下先生はアジア経済研究所という国の機関に在籍された新進気鋭の学者でした。専門家として途上国で仕事をされた方なので、ゼミ旅行がタイとか東南アジアでたいへん魅力的でした。3年生になった当時、まだ海外に行ったこともなく、飛行機も初めてでしたが、台湾、香港、バンコク、シンガポールなどに連れて行ってもらいました。東南アジアは発展途上で、日本

人が海外に行くるとすぐいい生活ができそうだなと思いい、就職活動では海外赴任の可能性のある金融機関を目指しました。

一卒業研究は何をされたんですか。

卒業研究は、タイの経済開発でしたね。まあ40年前ですからね。先行研究を参考にしながら、当時途上国のタイをどういう方向で発展させるかという論文を書きました。

一高校時代の学びはどのように生きていますか？

一つ言えることは、「覚えたこと」って、社会では役に立たないんです。今は知りたいことは何でもパソコンがアウトプットしてくれる。だから覚えてなくても調べれば良い。一方、「考えたこと」って次に繋がるんです。性格的に教えられるのは嫌いで、自分が考えたことを教えるのは好きで…タチが悪いでしょ？(笑)。それがあある意味、今の仕事の役に立っています。解き方を教えてもらってそれを覚えることより、何もなかったところから時間をかけて考えて結果を出す、答えを出すっていうのが得意なんです。その能力がすごく磨かれたいい高校時代でした。社会での仕事には正解はないから、大学では高校までと同じように解き方を覚えるのではなく、0から1が作れる、0to1の創造力を磨く訓練をしてほしいです。もちろん、1to10でもいいですが。一番最悪なのは1を1のまま覚えてやることです。

一やはり今、考える力・思考力はキーワードになっていると思うのですが、それを大学で培うにはどうしたらいいですか？

何でもいいけど、もちろん小さな社会課題解決でも、例えば、学校でも形のないものに挑戦してみる。学園祭とか、どう進めていくとお客さんが来て喜んでくれるか、とか。

一企画などでしょうか？

そういうことですよ。形のないものを考える力をいろんな事で挑戦するのが良いでしょう。もちろん部活でどうすれば勝てるか考えていくのもその一つでし

ようし。どんなこともただ普通にやっていたら、秀でることはできない、だからどうやったらよいか考える。ゼミや卒論で、これまでの考えとは違った方向を考えたりすることも良いです。先生が言っている、専門家が言っているではなく、「自分の頭で考える」。そうした訓練がこれからの社会では役に立ちます。

一社長の経験の中で、大学時代やリクルートに就職してから、また村上農園に転職してから、そういった「考える力」が活きた瞬間はありますか？

多分たくさん生きています。要するに、何もないところで何とかしなければいけないと考える経験が重要です。そして人が良いと言っても自分はこうするという軸を常に持っていないとダメだと思います。たまたま私は他人の言うことを聞くのが嫌いなので、他人が右と言えば左に行きたいんです(笑)。自分が何かをするとき、その性格がいい方に向かったんだと思います。未来が分からない中で「考える力」はすごく価値がある。

具体的にはリクルート時代に先輩からこの程度でいいと言われたところを、自分はよくないと判断して仕事を追求する。自分でやりたいから時間は関係ない。モチベーションは自分が決める問題で、他人に立脚してはいけません。「褒められて伸びるタイプ」とかよく言いますが、他人からの評価で一喜一憂するのではなく、自分の軸でやりたいことをやり、良い結果を出すことが、一番大事だと思います。結果が出ると楽しいですよ。周りからも褒められるよりも、自分がやるべきだと思うことで成果がどんどん出ていくのが楽しかったです。

最初の5年間の営業も自分で考えながら、次第に成果が出て楽しかったし、その経験が村上農園でも役に立ちました。1996年のO-157の風評被害で、当時専業のカイワレ大根がパツパツ売れなくなったときです。代わりに豆苗を売り込むことにしましたが、その時代、豆苗は世の中にほとんど知られていないので、主力取引先の卸売市場は相手にしてくれない。そこで、直接スーパーマーケットに営業に行くと多くの窓口を開拓しました。するとその後、どんどんウチの他の商品も

扱ってくれるようになったんです。営業って、日本語が喋れれば誰でもできるということではなく、リクルートでの営業経験が活きた瞬間でした。今ではうちの取引の80%くらいがスーパーマーケットと直接取引なんです。あの時、主力の卸売市場にこだわっていたら、今みたいな状況は全く生まれていない。また、自ら希望して移ったリクルートの関連会社での経験も大いに役に立ちました。小さな業界なので幅広い仕事を自ら何でもやらないといけなかったから、日々考えた。本体では出来ない経験が色々できた。そのことが、後々村上農園での商品開発やマーケティングにもものすごく役立ちました。

例えば、商品開発でパッケージを考えるとき。デザイナーが出してきた提案を、そのまま使うこともできるけど、自分で、これをこういう風にしたらもっとインパクトがあるとか、本当に伝えたいことが伝わるとかを自ら考え作成しました。営業活動から商品開発、マーケティング、それに没頭した10年間で、風評被害による窮地を救ってくれました。O-157でカイワレ大根が売れなくなって商品開発を始めたとき、どういう品目で何をするのか、誰も分からなかった。けれどその分からない中で、そういう経験があると、どういう商品をどういう形で作ってどう売っていったらいいのかが、自分の中で考えられて、その力が繋がって、現在の当社があります。

最初から、ここを目指してやっていたわけじゃなかったんです。私の場合はたまたまリクルートがどぶ板営業の会社だったこと、商品開発やマーケティングを若い時に経験できたことで、それが窮地に陥った時にはじめてその線が繋がったのです。本当に運が良いと思いました。今でもリクルート社および当時の上司には本当に感謝しています。

一私は将来の仕事について何をしたらいいのかわからず悩んでいるのですが、将来について考える上で大事にすべきことを教えていただきたいです。

言えることは、できるだけ厳しい所に身を置いた方が良いということです。方向性としての話だけど…。また、私がリクルートに入ろうと思った理由は、人材

採用という全ての産業の上に乗っかっているビジネスモデルだったからなんですよ。だから、日本全体が大きくなれば絶対に成長する。目指していた金融業界とは全く違うように見えて、お金の面か人の面かという違いで企業が成長するには欠かせないビジネスで、絶対的な需要がある。

だけど、例えば自動車産業で言うと、EVがどうなるかによって将来どうなるかは変わってきますよね。EVに必ずなるかどうかは分からないけど、そういう産業ってあるじゃないですか。今はすごくいいんだけどその後ダメになることだってあり得ます。もちろん起業するという選択肢もあるから、今だと必ずしも一概に言えないと思うけど。

もう一つは、会社がアグレッシブで社員同士が切磋琢磨する環境。一見ブラックにも見える、仕事中心の企業。つまり、厳しい環境に身を置くことが、自分にプラスになると思っています。これから入社する人間がワークライフバランスとか言って、それを許容する会社では力がつかないと思いますよ。

一総科はキャンパスが東広島にあって、東広島で完結してしまいましたが、東広島にずっといるだけでもいいのでしょうか？

東広島にいただけじゃダメでしょう。今の時代、東広島にいるからわからないということは少ないですが、やっぱり広い世界を肌で感じた方が良いと思います。私は仕事柄、ヨーロッパやアメリカに行く機会が多いのですが、旅行とかで観光地を見るのではなく、ビジネスの面で社会を見ると、日本とは大きな違いに驚きます。日本の常識が世界の非常識ということにも気付かされます。肌で感じると大いに刺激になり、物の見方が変わり、世界が変わります。野球でも大谷選手がメジャーでさらに開花したようにね。

一やっぱり大学生のうちから海外に行った方が良いでしょうか？

できれば見ておいた方が良いでしょう、逆に日本のことがよく分かるようになります。日本っていい国なんですよ。今、例えば東広島にいるなら、逆に東広島の良さ

が分かるかもしれません。ただ、海外旅行、観光だけでもダメです。町へ行って、店に入って、スーパーマーケットに入って、その人たちがどういう生活をしているとか、あるいは本当に家に行ってその人達の生活とかを見ていくと、何が違うのかっていうのが見えてきます。

—ありがとうございました。

ここからは村上農園さんのオフィスの様子をレポート！
村上社長が直々に紹介してくださいました。

—オフィス見学—

テーブルの中心に 360°カメラとマイク、スピーカーが仕込んである『Meeting Owl』が置かれた「ワールドコントロールセンター」。この機器が全 17 拠点に導入され拠点間で日々Web会議に使っている。センサーが発話者を拡大するのでマスクをしていても分かりやすく、一体感のある会議ができる。会議中は複数のディスプレイに栽培データ等を写して議論を深める。



▲技術の中核「ワールドコントロールセンター」

このセンターには圧力センサーがついた大きな電子地球儀がある。世界の気象情報をリアルタイムで見ることができ、種子生産をしている国の気象を知ることがに欠かせない。「世界征服のために買った」と笑顔で冗談を(けっこう本気かも?)。値段はなんと高級車一台分ほどだそう。



▲電子地球儀

会社の歴史をたどるギャラリー。社長が直接解説し
てくださった。



▲会社の歴史を紹介する「ギャラリー」



▲村上農園の歴史を紹介して下さる社長

【村上農園について】

豆苗、スプラウトなどの発芽野菜や高成分野菜(※)、
レストラン向けマイクロハーブの生産・販売、さらに
新野菜の企画・開発・販売等を行っている。

【村上農園の歴史】

1960年代に先代創業者が「紅たで」の生産を始め、
1987年、工業化した野菜の「カイワレ大根」の生産を
開始、その後全国7拠点に拡大。業界トップに。1996
年、大阪府堺市で集団食中毒事件が発生し、カイワレ
大根の風評被害に苦しむも、「豆苗」の拡販等で業績を
V字回復させた。その後、ジョンスホプキンス大学と
提携し、「ブロッコリースプラウト」における日本国内
の独占ライセンスを取得し1999年に発売。2001年
には機能性を高めた「ブロッコリースーパースプラウト」
がさらなる成長をもたらした。2007年に村上社長が就
任、2014年にはオランダのメーカーとマイクロハーブ
に関するクロスライセンス契約を締結し、目下レスト
ラン等の業務用の販路開拓も進める。

※ 高成分野菜とは

本来まったく、あるいは微量にしか含まれない機能性成
分を、品種改良や栽培技術を用いて高含有にした野菜のこ
と。

(村上農園 HP より)



村上社長、ありがとうございました！

“Remember why you are in university”



Saruda Hannah Westerman

Graduate Student of Hiroshima University
Department of Integrated Global Studies (IGS)

When you were in IGS, what did you do in your free time?

I used to enjoy spending as much time outside as possible, especially when the weather was nice. Whether it is going for a walk in the park, exploring nearby trails and nature reserves, or simply relaxing outside with a good book and soaking up the sun. I also liked to stay active by hitting the gym several times per week. I maximized my fitness by lifting weights, doing cardio, or attending one of the many fitness classes. Of course, socializing with friends was great fun. We used to go grab food, study together, or just hang out at someone’s place. It was always a great time.

What are you doing right now in Thailand?

So I am currently in this transitional phase, preparing to relocate abroad for work. It’s all very exciting, but I’m just relaxing at home, spending time with my

family, and catching up with friends. It is nice to have this breather before starting a new adventure. I’m preparing to work as a flight attendant for a Middle Eastern airline.

Why did you choose Hiroshima University? Why did you choose your major?

There are many reasons why Hiroshima University was the best choice for me. I chose Hiroshima University because of its excellent reputation and fantastic campus atmosphere. What really sealed the deal for me was learning about the faculty. I have only heard positive feedback about the professors. They are not only experts in their fields, but also genuinely concerned about their students. The student community is like a big family. Everyone helps each other, making learning much more fun. I was fortunate enough to receive a full scholarship, which was like the cherry on top.

I chose the fields of peace and communication because I believe that communication is essential to all humans.

Interaction and studying it help me understand the dynamics of how people exchange information, ideas, and emotions. I believe that everyone knows how to



“talk” but not how to “communicate effectively.” We live in a world where connections are more important than ever. I believe that communication is essential for unlocking doors and forging meaningful relationships.

To be honest, I am not the best at mathematics, so I decided to embrace the power of words rather than struggle with numbers. Because, let us face it, speeches are far more entertaining than logarithms.

What do you think about the teachers in the address and the study and life environment in Hiroshima?

As I previously stated, the professors at Hiroshima University are exceptional. They are extremely knowledgeable and dedicated, and most can break down complex concepts into digestible chunks, making even the most difficult topics appear manageable. Their impact extends far beyond the classroom. They are mentors and role models who will go above and beyond to help you.

Overall, my time at Hiroshima University was very pleasant. I have grown both academically and personally. I've met people from all walks of life, each with their own unique perspective and story. This diversity has deepened my understanding of the world. Furthermore, it has broadened my horizons in ways I never expected.



Did you join any clubs or circles in our school?

Unfortunately, I was unable to join any clubs due to a language barrier. Because I did not speak Japanese fluently, I was hesitant to participate in activities that required communication in Japanese. It felt intimidating to join a group where everyone was speaking in a language I was not fluent in.

However, I know many of my international friends who participated in clubs or circles and thoroughly enjoyed it. So, if you're considering joining a club or circle, try it.

Did you face any difficulties during your four years at the university? How did you overcome those challenges?

You know, university life is not always sunshine and rainbows. There are definitely some difficulties associated with attempting to grow up and get your life together.

I faced some challenges that put my resilience and adaptability to the test. Maintaining relationships with friends, family, and loved ones was difficult due to academic and financial pressures. However, these challenges have helped me become a better, stronger, and more confident person. As the saying goes, what doesn't kill you makes you stronger.

For four years here, do you have any memorable memories of moments or achievements with your friends, schools, or professors?

There is so much I could say about this topic. I thoroughly enjoyed the university festival. There's something special about spending time with your friends, eating good food, listening to good music, attending concerts, watching fireworks at night, and forgetting about studying for the day!

Have you maintained any connections with your friends or alumni? How do you think that those relationships and connections impact your life after graduation?

I'm still in touch with some university friends. Although we may have graduated and parted ways. We occasionally communicate via group chats and Instagram, and we are currently planning a reunion party, which I am really looking forward to.

Do you have any advice for the current freshmen? How about the high school students who want to apply for IGS and Hiroshima University?

What I believe is most important when starting

college is determining who you want to be. Believe me, I was all about parties in high school. I didn't give much thought to hitting the books. But when I got to university, reality struck.

My advice is that you have to have a good, healthy balance between having fun and studying. You must stay focused and do not lose sight of your goals.

For my schoolers... before you begin the application process, do some research and gain a solid understanding of what IGS is all about. Prepare to embrace the chaos and enjoy the ride. You will not be sorry you chose IGS.

The university is full of surprises, and the bottom line is to enjoy the moment. Give it your all. Sleep early (if possible). Drink water, study hard, and remember why you're at university. Good luck!



学生独自プロジェクト

紹介インタビュー

広島大学総合科学部では、学生自身で企画・遂行する学際的研究プロジェクトを支援する『学生独自プロジェクト』制度があり、学内研究活動の活性化につながっています。今回は、令和4年度 学生独自プロジェクト『地域特性に着目した学園都市での相互型防災活動』の猪股雅美さん（写真左）と橋村侑希さん（写真右）にお話を伺いました。



中で、相互に地域の勉強をしながら、災害の防災意識の向上にも繋がらないかなと思って始めたのが、この「相互型防災活動」なんです。

学生さんの中には下宿など、大学生になって初めて東広島に来る人も多いので、緊急事態が起きても「避難場所がわからない」とか、「どのくらい危険か」みたいな感覚が一人一人で違っていると思います。その感覚を、新しく東広島に住み始めた人とすり合わせていくような感じだと想像していただければ理解しやすいかと思います。

ープロジェクト立ち上げのきっかけや具体的な内容について教えてください。

猪股さん

西日本豪雨の時に学生さんがどのような動きしていたかを調査したところ、ほぼ避難していなかったことがわかったんです。その理由を聞くと、

- ・どこに行けばいいのか全くわからない
- ・防災情報の地名がピンとこないで、“どこで何が起きているのか”がわからない

などが挙がっていました。

雨の降り方も地域によって全然感覚が違って、九州から来た学生さんにとっては降水量400mmって「へ？」って感じだと思いますが、東広島での400mmは相当なので、そういった地域特性がちゃんと分かっていないといけないなと思いました。加えて、東広島の住民の方も実は新規の方が多いんです。このような

ープロジェクトを実施するにあたって元々防災や災害に興味があったのでしょうか。

猪股さん

現在、私の専門が土砂災害なので、防災関係のプロジェクトがしたいと思っていました。また、防災士さんの会合で知り合った防災についての研究をしている方や、高校のなかで全国でも数少ない「防災科」の卒業生の方などが集まってくれました。さらに、橋村さんが元々防災のボランティアを本格的にしている、そういった人の集まりでできたグループがちょうどあったんです。

橋村さん

そうですね。人数は5人ほどで結構少ないんですけど、大学のサークルとして実際に地域（小学校など）に出向いて防災講座をしに行ったり、防災のパネルを作って色々なところに出展したりといった活動をしていたので、そこでの繋がりがあって、私たちの団体（ア

イリス) から3人がこのプロジェクトに参加することになりました。

ーボランティア団体「アイリス」の活動内容について教えてください。

橋村さん

災害時にはボランティアに行くんですけど、1年間の中ではそういった活動をするだけでは活動日が少なくなってしまうので、防災ポスターを作ったり、地域の防災士の方との関わりを活かして、過去の災害の写真展を一緒に開催したりしています。その中で、災害の写真を貼るだけじゃなくて、「これからどうしたらいいのか」という備えについて自分たちでポスターにまとめて掲示しました。あとは安芸津町で危機管理課の方と一緒に高齢者に向けて防災講座をするなど、外部の方と一緒に防災関係の活動をすることが多いです。

ー橋村さんがボランティア団体に入ったきっかけは何でしたか。

橋村さん

私は広島出身ですが、南海トラフ巨大地震が来たら広島はどんな被害があるのか、というのを中学生の時に先生が毎時間話していました。すごく怖いなと思い毎日おびえていたんですが、「怖がるだけじゃなくてどうやったら被害を最小限に防げるかを考えたら？」という母からのアドバイスがきっかけの1つです。

あとは西日本豪雨災害があって、電車で数十分いったところで死者が出てしまうようなことがあったり、報道で「私のところは大丈夫だと思っていたのに」とお話をされている方がいたりして、毎年災害が繰り返



されて情報が出てるのに、苦しんだり悲しんだりする人が出てしまうのをどうすれば防げるのかを考えたかったです。そのために、大学では避難行動などについて勉強するとともにボランティア団体に入って実際に防災活動をやりたいという思いが強かったのがきっかけですね。

ーこれから防災の意識を高めるためにできることとしてどんなことがありますか。

猪股さん

学生さんやこれから社会人として一人暮らしをする人に向けてにはなりますが、住むところは事前に選ばないといけないと思います。自宅が安全な位置だったら、避難中の事故（意外と多いそうです）も防ぐことができるし、家にストックして食料とかを持っていればいいから、住むところを最初によく選ぶ、っていうのが大事なと思います。あとは豪雨などであれば高いところに住んでいる友達を把握しておいて緊急時に駆け込むとかですかね（笑）。

ープロジェクトのメインの活動として実際にどのようなことをしているのでしょうか。

猪股さん

大学祭がメインです。小学校や中学校などで防災や災害について出前授業（写真）をするんですけど、その子供たちに希望者を募って大学祭で発表をしても



らっています。そして発表をしない子も、展示物やポスターを作ってくれているのでそれを展示室に貼り出しています。

そうすると普通に地域の災害について知ろうとするよりも、地域の子供たちが発表してくれているからという理由で聞こうとしてくれたりするんです。

さらに、実際に聞いていただいた方からの声を聴いてみると、「来年もこのようなものを開催したほうが良いと思いますか」という質問に対して、9割くらいの人からやった方が良いと言ってもらえたり、「今まで受けていた防災についての教育と比較して今回のものはどうですか」という質問には、多くの人に「より良い」と答えてもらえたりしました。そういった声からも、このような新しい試みは防災活動の一つとしていいのではないかと考えています。

—プロジェクトの今年や今後の活動についてお聞かせください。

猪股さん

今年（インタビュー時：令和5年7月）は私が博士論文の発表準備で忙しかったり、活動のメンバーも2人ほど卒業していたりといった事情から、活動はあんまりという感じです。しかし、できれば活動はしたいと思っていますし、地域の人たちの中でも「学生さんと繋がりたい」という方は少なくないんです。ただ、やはりこういった交流は継続的じゃないといけないなということで、個人との繋がりよりも団体との繋がりを求めている状況です。というのも大学生個人となると4年で、就職で県外に行ってしまうたりしますよね。そういう面ではやはり学生と地域の繋がりを維持するのは難しいのが現状です。

—このプロジェクトを通してよかったことや、できた繋がり、こんな反応が嬉しかったな、などがあれば教えてください。

猪股さん

私は今までずっと一人研究だったので、グループで何かするっていうのがすごく嬉しかったです。そしてこのプロジェクトを、論文として防災教育学会誌というものに出してみたところ、査読付きだったんですけ



ど通って、学会誌に掲載されたんです。活動自体としても新規性があって面白かったのかなと思いました。副学長表彰も頂くことができました。今までの防災講座よりもちょっと踏み込んで、興味が持てるような活動に出来ているのかなと。もっと柔軟に色々なことができればいいなと思っています。

—メンバー集めから実践まで一年間やり切ったお二人から、総科生に向けてアドバイスなどはありますか。

橋村さん

部活でも何でも、自分がやりたいと思ったことを熱心にやり続けてみてほしいです。

私は入学前から防災関係のことをやりたくて団体に入りました。ずっと一つのことをやっていくと、猪俣さんなどを始め、地域の防災士の方など授業に出るだけでは知り合えない方々との繋がりができ、大きな学びや刺激になりました。なので、そういうところから新しい繋がりを作ったり発見をしたり出来たら、すごく良いんじゃないかなと思います。

猪股さん

もともと理学部出身だったのですが、総合科学部は「総合」というだけあって、たくさんの分野の人が集まっているじゃないですか。それを生かさない手はないなと思って。このプロジェクトの条件が実は「他の分野の人が必ず入ること」なので、そういう意味では、新しい発想が出来るようになりました。

皆さんにも積極的にこのような活動を利用して、大学の中で勉強以外でも色々な活動をしてほしいなと思います。

猪股さん、橋村さん、

ありがとうございました！



総合科学部の1年

「コロナ禍で希薄になりつつあった総合科学部の繋がりを『再勢』したい。」
2023年度は04（R4入学生）総代を中心とした運営メンバー、04と05
（R5入学生）新生が合同となって、多数のイベントが開催されました。
総代の志方一稀さんのコメントと共に、総科1年間の歩みをご紹介します。



04 総代
志方一稀さん

4月 縁を創る「新生歓迎イベント」

新生にとっての最高のスタートを！と銘打ったイベントが行われました。交流会やオリキャンなど新生同士、先輩とのつながりを作るイベントが盛りだくさん！

入学式前新生交流会



入学式後新生交流会



履修登録会



総代「実行側の04としても初めての新生イベントでした！沢山の総科の後輩と繋がれてうれしい気持ちでいっぱいでした（^^）」

6月 縁を広げる「季節のイベント」

6/17 遊技大会



大学にも慣れてきたところで、みんなで仲良くなろう！とチーム戦形式のイベントを開催。テスト後なのもあり、みんなでリフレッシュしながら楽しく遊びました。

総代「04と新生が深く関わる初めての機会です、新しい総科の形に出会いました！」

8月 縁を深める「思い出の共有」

8/5,6 宮キャン



一大イベントである宮島でのキャンプ。宿泊行事では、朝から晩まで同じ時間を共有し、新たな縁のきっかけを得る機会となりました。BBQやキャンプファイヤー、花火、海水浴、スイカ割り…と夏を満喫しました。また、2日目には宮島観光を行いました。

総代「一から作り上げる宿泊イベントで沢山トラブルにも見舞われましたが、充実した顔で帰っていく参加者を見て疲れが一気に吹き飛んだのもいい思い出ですね。」

10月 縁をつなぐ「大運動会」

10/1 総科大運動会



屋内外での競技を楽しみました。宮キャンでつないだ絆が生かされるイベントになったのでは？

総代「最後の、総代 VS それ以外の地獄の鬼ごっこは、きっと走馬灯に浮かぶ出来事なんだろうなあと思います（笑）」

12月 縁をつづける「季節のイベント」

12/21 総科クリスマス会



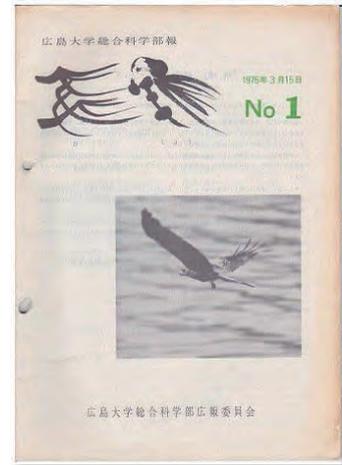
一年間の最後のイベント。仮装をしたりお菓子を食ったり、仲間たちと楽しい時間を過ごしました。

総代「これまでの感謝の思いも込めた心に残る素敵なイベントでした。」

100号刊行記念



↑総科が設立された1974年の7月、『飛翔』の前身雑誌『総合科学』が発行。コース紹介や、当時はまだ珍しい『総合科学』という学問の可能性について学部長などからメッセージが寄せられている。



↑1975年の3月、『飛翔』の第1号が発行。新学部をここから成長させていこうという、学生の情熱が込められている。研究紹介、総科生調査などが掲載されている。

1974年

総合科学部 設立
地域文化、社会文化、
情報行動科学、環境科学
の4コース

1987年

コース改組
地域文化、社会科学、
外国語、数理情報科学、
物質生命科学、
自然環境研究、
生体行動科学の7コース

1989年

元号が「平成」に

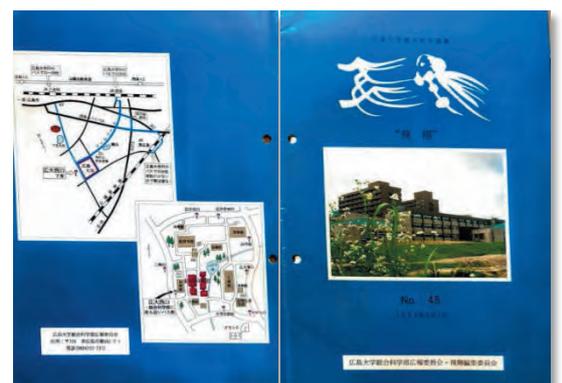
1992年 1993年 1996年

飛翔 50号を発行
総合科学部が東広島市に
移転完了
コース改組
人間文化コースが新設され、
計8コースに

↓様々な『飛翔』。初期は年に2,3回程度発行されていた。



↓新校舎を表紙に構えた45号。



全 100 号分の飛翔は広島大学総合科学部 HP で公開中です。ぜひご覧ください！

アクセスはこちらから→



これからの飛翔もよろしくお願いたします！



↑ 2018 年 3 月、『飛翔』第 93 号が発行。IGS が新設され、新学科の紹介がされている。



↑ 2022 年 98 号、2023 年 99 号。これらを読んで現在総科に入学している学生も多いのではないだろうか。



↑ 2024 年 100 号。第 1 号をオマージュした表紙デザイン。



2000 年

6 教育プログラム制の導入
8 コース制から
プログラム制へ

2006 年

10 教育プログラム制の改革
6 プログラム制から
プログラム制へ

2013 年

11 教育プログラム制の改革
10 プログラム制から
プログラム制へ

2018 年

国際共創学科 (IGS)
が新設

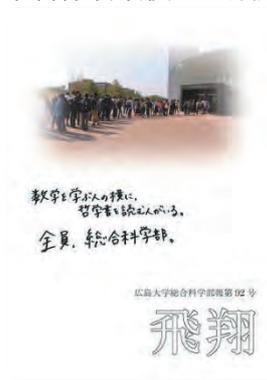
2024 年

総合科学部 創立 50 周年
飛翔 100 号を発行

↓ 2007 年 72 号。
これはどこの犬…？



↓ 2017 年 92 号。
一学科体制最後の『飛翔』



↓ 2018 年 94 号。
IGS が加わりより一層華やかに



編集後記 EDITORS' COMMENTS

～2年生幹部編集員～

安部 夏生（編集長）

この度は『飛翔』を手にとっていただきありがとうございます。記念すべき100号目の制作に携われたこと、うれしく思います。編集長としては本当に至らない点が多く、編集委員のみんなはもちろん、飛翔OBの先輩方、支援室や広報・出版委員の皆様にとくさんご迷惑をおかけしながら、そしてとくさんご協力いただきながら、一つの形にすることができました。本当にありがとうございました。私自身も高校時代『飛翔』を通して総科を知り、興味を持った一人でもあったので、本号がどなたかにとって、総科を知るきっかけになっていれば幸いです。

大塚 樹（副編集長）

自分の専門ではない先生のお話を聞くいい機会となりました。また、専門的な内容をまとめる事の難しさも感じました。

Ajdari Mohammad (Rudy) (IGSリーダー)

It is a historic moment for me, I feel grateful to be involved in the 100th cover of the HISHO magazine. I am thankful to the people involved with HISHO who are all amazing and fun to work with.

川口 亜実

『飛翔』での活動を通して1つのものを作り上げる大変さと、たくさんの人と関わる楽しさを学ぶことができました。一緒に活動してくれた方も、ここまで読んでくださった方も、本当にありがとうございました！

竹内 結萌

在校生の記事を担当しました。去年は取材や編集が中心でしたが、今年は去年の経験も活かしながら後輩をサポートする側になって、また違った学びを得ることができました。色々な人と出会えて話せたり、在校生のインタビューで面白い話を聞けたりと、今年もとても楽しかったです！たくさんの方の想いが詰まっているので、是非楽しみながら読んでみてください～！





原田 夏南海

取材や編集を通じて、総科の魅力を改めて感じる事ができました。作成に協力してくださった皆さん本当にありがとうございました。

坊垣内 あかり

インタビューを通じて先生のお話を聞くことができ、改めて総科での学びや将来について考える機会になりました。ここまで読んでくださりありがとうございました！

前平 紬希

普段関わることのない、他領域の先生のお話が聞ける貴重な機会をありがとうございました。お話の中で、総合科学部の魅力、可能性を改めて感じる事ができました。

三島 里桜

二年間『飛翔』で沢山総合科学部に触れることによって、総科ならではの多様性や幅広さを実感し、総科の魅力を改めて実感しました。ありがとうございました。

室山 燦子

『飛翔』制作を通して、1つのものを作り上げるのはすごく大変で、たくさんの

方々のご協力と、自分たちの努力や工夫が不可欠だということを学びました。なかなか聞けないお話が詰まっておりますので、みなさんに楽しみながら読んでいただけると幸いです！最後になりますが、『飛翔』制作に関わってくださった方々、本当にありがとうございました！

～1年生編集員～

沖 歩華

大学の教授の方へのインタビューを通して今まで知らなかった専門分野のこと、総合科学部のことを深く知れてとても良い経験になりました。

紙谷 翔太郎

自然探究領域とOBの取材を担当させていただきました。

『飛翔』を手にとって下さるみなさんが何を知りたいのか考えながら、インタビューすることを心がけました。この本が皆様のお役に立っていると幸いです。そして、『飛翔』の作成にご協力頂いた方々、誠に有難うございました。



木谷 優花

将来についてのビジョンが見えず不安に思っていたとき、インタビューを通して色々な方とお話をする中で何か見えるかもしれないという思いから『飛翔』編集員に立候補しました。相手がしゃべりたいと思うような質問をインタビューの場で臨機応変に考えるのは大変でしたが、かけがえない貴重な経験となりました！

佐田 よつ葉

教授や関係者の方々との交流を通して、総合科学部についてより深く知ることができました。このような貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。

中嶋 紗代

取材や編集の仕事をしてみたいという思いから『飛翔』に参加しました。みなさんも学生のうちにやってみたいこと・経験がないことにどんどん挑戦してみてください。

中原 遥子

総合科学部の教授に直接取材をし、興味深いお話を伺うという貴重な経験を行うことができました。取材を通して、総合科学部の奥深さや研究することの面白さを知ることができました。協力してくださった方々、本当にありがとうございました！

橋本 直人

広島大学や大学生活への理解を深めたいと考えて、『飛翔』の編集に参加いたしました。先生や学生へのインタビューを通じて様々なことを学ぶことができました。読んでいただきありがとうございました！

原 花

新しいことに積極的にチャレンジしたいという思いで『飛翔』に参加しました。大変なこともありましたが、横はもちろん、縦のつながりも持つことができるとても貴重な経験だったと感じています。少しでもみなさんのお役に立てるような記事になったら嬉しいです！

福田 百花

教授のお話を聞く機会をいただき、新たな発見があり、自分の考えをまとめるきっかけになりました。飛翔に携わらなければ出来なかった貴重な経験でした。『飛翔』に関わってくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

藤澤 乃彩

高校生の時に読んで、総合科学部に憧れるきっかけだった『飛翔』に関わる事ができて、とてもいい経験になりました。総合科学部のたくさんの人とお話できて、とても学びのある1年でした！ありがとうございました。



正中 心海

IGS 在校生の記事を担当しました。会議やインタビュー、記事作りの全てを英語で行うのは初めてで、とてもいい経験になりました。IGS の魅力がたくさん伝わってくる記事になったと思うので、在校生だけでなく、IGS に興味を持っている方にもぜひ読んでいただきたいです！

峰 康介

今までやったことのない編集やインタビューなどの仕事をしてみたくて、『飛翔』に参加しました。OB の取材を担当させていただいたおかげで将来のことを深く考えるきっかけになりました。学生のうちに参加できてよかったです。

森 聖華

興味のある人間探究領域の先生のお話を聞くことができ、2年次から人間探求領域で学びたいと思うきっかけになりました。このような機会を頂けたことに感謝します。

将来の選択に役立つような記事になっていれば幸いです！

山地 桃加

初めての事ばかりで右も左も分からず戸惑うことも多かったですが、多くの方に協力していただきながら編集活動に携わることが出来て嬉しかったです。『飛翔』の制作にかかわってくださった方々、『飛翔』を読んでくださった皆様、ありがとうございます！

廉 明德

先生に直接研究のお話を聞いて、非常に楽しかったです。『飛翔』を手にとっただきありがとうございます！皆さんにとって、色々な領域に触れる機会になれば嬉しいです。



長谷川 博 広報・出版委員長

記念すべき『飛翔』100号の出版、おめでとうございます！先生方へのインタビューや飛翔の変遷となる「あゆみ」をまとめたことで、改めて総科の魅力や今後について再考できたかと思います。今年は有難いことに多くの学生が編集員として協力してくれました。先生方へのインタビューや編集作業は大変だったと思いますが、皆で協力して行った共同作業の経験は皆さんにとって大きな財産となったはずです。これからも人と人とのつながりを大切に、いろいろなことにチャレンジしてください。

溝淵 正季 広報・出版委員

記念すべき『飛翔』100号、発行おめでとうございます。コロナ禍が（一応）一区切りついたということで、本号は前号にも増して沢山のインタビュー記事が掲載されることとなり、充実した内容になったと思います。編集員の皆さん、本当にお疲れさまでした。

振り返れば、本年度も世界は多くの危機に見舞われました。ロシアによるウクライナ侵攻はさらに長引く局面を迎え、紛争が再燃したイスラエル・パレスチナ問題は深刻な人道危機を生み、気候変動や生物多様性の喪失など環境問題は一層の注目を集め、緊急性を増しています。そうしたなかで、「文理融合」の知の拠点である総合科学部という存在はますます重要になってくるように思います。次代を担う皆さんには、本学での学びを活かし、新しい時代を切り拓いていくことを期待しています。

町田 章 広報・出版委員

学生編集委員の皆さん、お疲れ様です。受け取る側の気楽さと作る側の大変さのギャップを身をもって経験する良い機会になったのではないのでしょうか。そしてそれと同時に、能動的にかかわり新しいものを創作することの充実感も味わうことができたのではないのでしょうか。この経験を糧に積極的に社会に関わる充実した人生を歩んでほしいと思います。



この度は『飛翔』100号をお読みいただき、誠にありがとうございました。

今年は『飛翔』100号の発行、そして総合科学部の創立50周年という大きな節目を迎える年となります。たくさんの方々の支えがあってこの年を迎えられたことに感謝し、また、このような年の『飛翔』の編集に携われたことを光栄に思います。

この『飛翔』が発行されるまでに、1年生、2年生あわせて約40名の学生が1年間をかけてインタビュー、編集、レイアウト等を行ってまいりました。慣れない記事の作成に心が折れそうになったこともありましたが、多くの方々の協力によって完成することができました。

最後に、取材にご協力してくださった皆様、総合科学系支援室の皆様、そして最後まで読んでくださった皆様に謹んで御礼申し上げます。

今後も更なる飛躍を目指してまいりますので応援よろしく申し上げます。

飛翔幹部一同



▼『飛翔』HP 公開中！



▼バックナンバーはこちら



総合科学部報 『飛翔』
令和 6 年 3 月発行 通巻 100 号
広島大学 総合科学部
広報・出版委員会
〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1
TEL 082-424-6319

